

ニュータウンにおける自走型自治を目指す私設公民館

「まちの家事室・泉北ラボ」の運営実態の把握



2111910169 大石悠斗

## 1.1.研究の背景・目的

2

### 背景

日本のニュータウンは、高度経済成長期における人口増加に対応するため、1960年代から開発が進められてきた。ニュータウンにおける地域コミュニティづくりの取り組みとして、多摩ニュータウンの「福祉亭」や千里ニュータウンの「ひがしまち街角広場」などの実践がある。



ひがしまち街角広場

<https://newtown-sketch.com/projects>

### 現状

しかし、開発から数十年が経過し、現在では住民の高齢化、施設の老朽化、地域コミュニティの希薄化といった深刻な課題に直面している。



### 目的

- 地域住民が自主的に設立・運営する私設公民館「**まちな家**・**泉北ラボ**」に焦点を当てる。
- 住民が主体的に地域の課題に取り組む「**自走型自治**」を促進している。また、地域のソーシャル・キャピタル（社会関係資本）を醸成する役割を果たすことが期待されている。
- そのため本研究では、泉北ラボの運営実態を明らかにし、**自走型自治の意義とその実現に向けた課題および可能性を探求**する。

## 1.2.既往研究について

3

### 既往研究と本研究の位置づけ

- 1) 張ら（2005）は「ひがしまち街角広場」の**利用実態と利用者意識**について研究し、存在意義を明らかにしている。
- 2) 田中ら（2007）は、**コミュニティカフェの設え**に関する研究をまとめている。あらかじめ全てが設えるのではなく、運営を通して徐々に設えていくと意義されており、地域住民によって規定されていると説明している。
- 3) 田中ら（2007）は、**主が築く他者との関係**が無限の広がりを持ち得ない以上、1つのコミュニティカフェが実質的にあらゆる人々に対して等し「開かれる」ことはないと言っている。

→本研究は**運営の変化を明らかにし、地域の課題に対応した私設公民館のモデルとして、新しい自治の在り方を明確にすることを目的とする。**



## 1.3.研究の方法

4

### 調査場所：まちな家「泉北ラボ」

- 泉北ニュータウンの泉ヶ丘地区、高倉台1丁目2-1
- 大阪健康福祉短期大学キャンパス内のコミュニティ施設。
- 地域課題を解決する拠点として、住民主導の「自走型自治」の実現を目指している。



### 1) 運営スタッフへのヒアリング

対象者は施設の代表者、コーディネーター

### 2) 現地での参与観察

筆者がコーディネーターとしてボランティア活動する

### 3) 関連文献のレビューを組み合わせ

泉北ラボに関する資料を集めて自走型としての取り組みを分析する。





## 1.4.研究の構成

第1章：序論



第2章：泉北ラボの運営組織の実態調査



第3章：イベント利用時における空間利用の実態調査



第4章：カフェ併設型コミュニティフリッジの現状と課題



第5章：結論

# 目次

第1章：序論



第2章：泉北ラボの運営組織の実態調査



第3章：イベント利用時における空間利用の実態調査



第4章：カフェ併設型コミュニティフリッジの現状と課題



第5章：結論

## 2.1.泉北ラボの設立背景

7

所在地	大阪府堺市高倉台1丁2-1
開設日	2022年1月17日
営業日	月曜日～土曜日の9：00～18：00
施設	Yyカフェ、ランドリー、まちライブラリー、レンタルスペース、コミュニティフリッジ
運営主体	公益財団法人「泉北のまちと暮らしを考える財団」
来訪者	地域住民6割、学生2割程
設立経緯	地域の社会的孤立を解決するために、ヒト・モノ・コトが出会う広場的な空間を目指している





## 2.1.泉北ラボの設立背景

### 代表：宝楽陸寛氏



### 経歴

・42歳。大阪府河内長野生まれ。  
泉北財団の理事長、NPO法人SEIN  
コミュニティLAB所長をしている。

### きっかけ

・小学校6年生時に出場した欽ちゃんの仮装大賞クラブ。本戦出場のため、地域の方々が資金を支援をしてくれた。結果は準優勝で賞金50万円もらえたが、テレフォンカード1000円分のみだった。ものすごく怒ったが、**地域が貢献してくれたから地域に還元するのは当たり前**という地域の親の姿勢が面白いと感じた。

・15歳からまちづくり活動を始め大学卒業後、今の中間支援の仕事に取り組んでいる。

## 2.1.泉北ラボの設立背景

### プレ調査

- ・コンセプトは、地域住民が日常的に訪れ互いに支え合い、孤立や困難に直面する際に頼りとなる場所を提供する。
- ・「花びらのように広がる支援」という比喻は、多くの活動やサポートが同心円状に広がり、誰もが必要とする際にそれぞれの「花びら」にアクセスできるというイメージを表している。
- ・物理的な支援だけでなく、**社会的つながりの提供や住民の自己効力感の促進をも視野に入れており**、地域コミュニティの持続的発展に向けた意識を持っている。

### 参考文献

田中美莉：コミュニティスペースが地域に与える影響について  
- 泉北ニュータウンの泉北ラボを事例に- 2023年  
武庫川女子大学卒業論文

- ・回答者は49人。年齢層は30代40代が多かった。
- ・利用者の割合は6割が地域住民、2割が学生。
- ・利用頻度は月1回以下が6割、月2-3回が3割いた。
- ・利用目的は、43名がカフェ、11名がイベントであった。  
(複数回答あり)
- ・50代、80代利用者にヒアリングし、地域活動の積極的参加が見られた。







## 2.3.ヒアリング調査による運営組織の分析

### 運営スタッフの役割

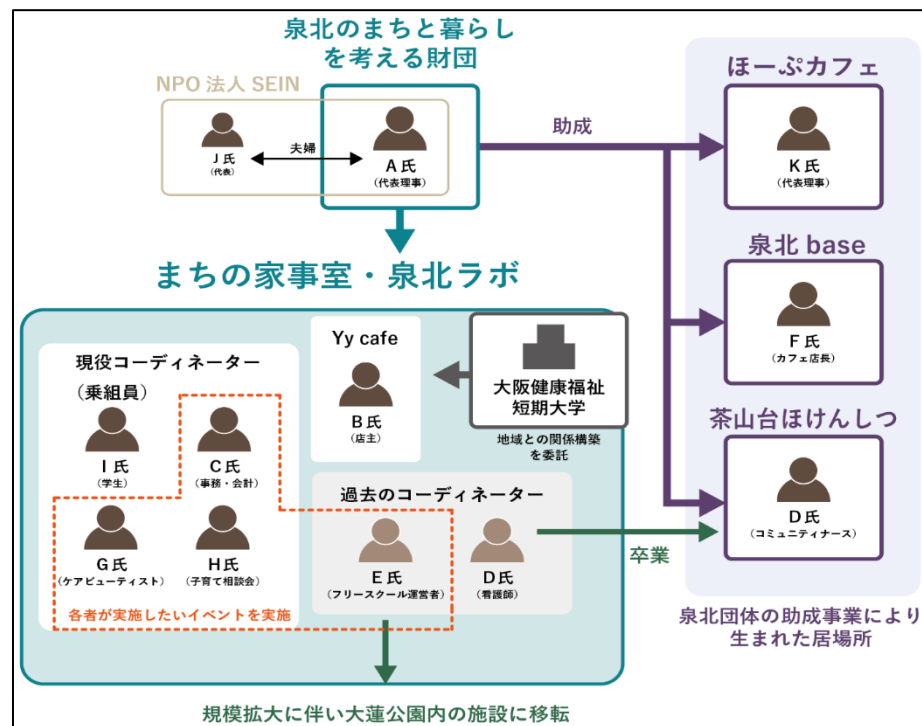
① **コーディネーター**は、利用者との「世間話」を通じて信頼関係を築き利用者の困りごとや必要な支援を引き出す役割を担っている。

→施設内で**気軽に相談できる雰囲気**が醸成され、利用者が自己表現や課題解決に向けて行動しやすい環境が整備されている。

② **乗組員**は施設の日常的な管理業務を行いながら、利用者の動向やニーズに対応している。また、定期的なコーディネーター会議を開き、**利用者のニーズに即した支援策を模索**している。

→支援する側とされる側が区別されることなく、地域コミュニティの一員としてつながり合える場を創出することを目指している。

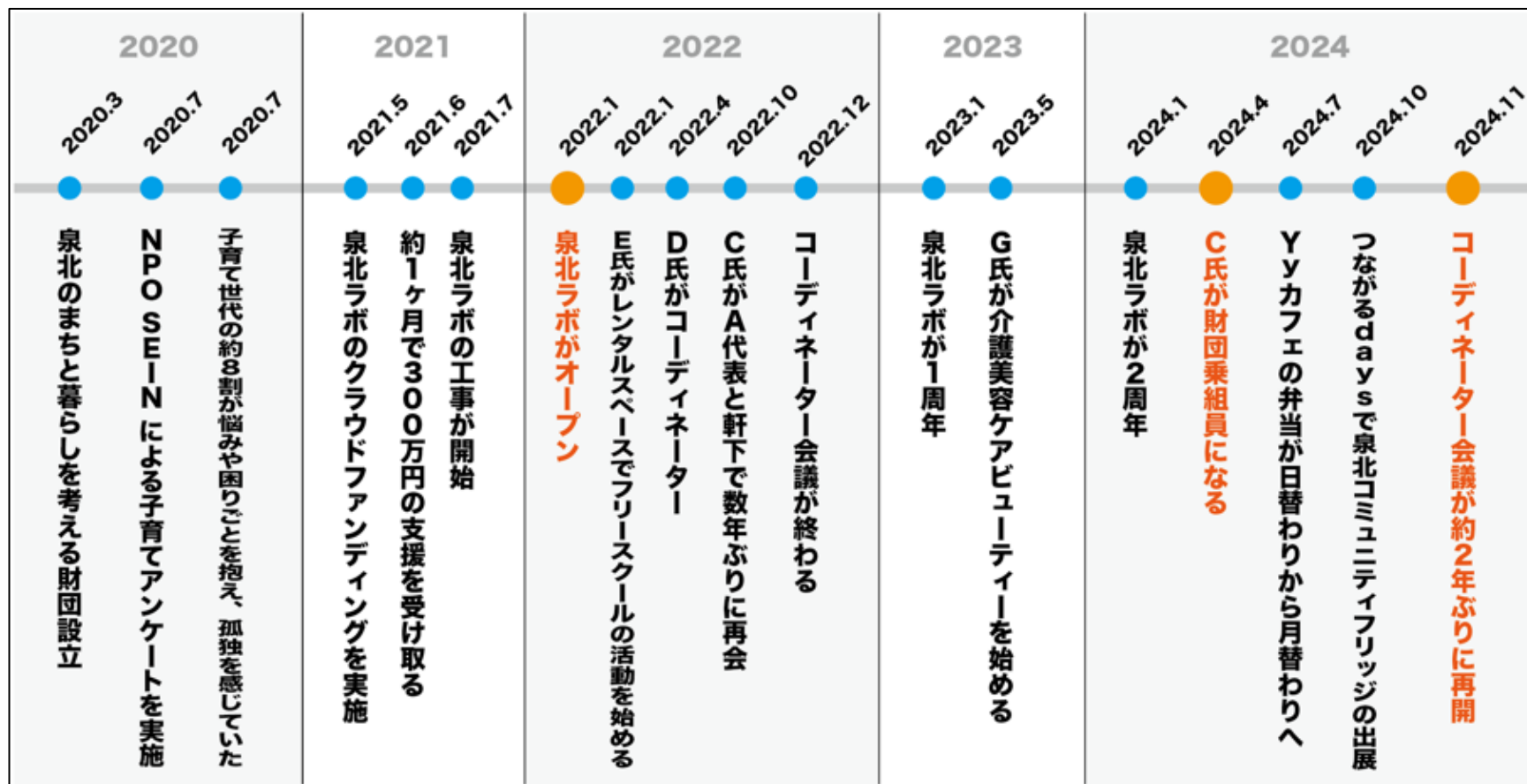
### 運営組織図



## 2.3.ヒアリング調査による運営組織の分析

13

### 財団設立～現在に至るまでの時系列の整理





## 2.3.ヒアリング調査による運営組織の分析

### 宝楽代表とコーディネーターらへのヒアリング結果

	意識	変化	課題	改善点
A代表	① 泉北世間話をする ② 打ち解ける事で課題に対処する ③ 泉北ラボの顔が毎日変わる。	コーディネーターの役割が少しずつ変化した。また、関係人口が3倍、4倍となり情報の量がものすごく増えた。	関係人口が増え情報量が多くなり、コーディネーターが何かしたいと思う。よって、 <b>心に火が付き卒業してコーディネーター不足</b> になっている。	<b>泉北ユースサービスセンター</b> という大学生が中心となってボランティア活動をするプロジェクトを始めた。
B氏	気づいたら動く。カフェの仕事以外にも施設内の作業をする。 <b>こぼれ落ちてそうな困りごとを拾ってる。</b>	学び続けてる。子育て相談会のH氏や地域の方と話す機会が増え、自身の知らないコミュニの事を知れた。	泉北ラボはA代表が <b>忙しすぎて人材不足</b> になっている。カフェは、自身以外の人々が接客出来るように後継者を探す。	泉北ラボは、大学生を巻き込む。ボランティアセンターを作る。カフェは、後継者を探すことは急がずに、周りが見れる人物像を描いておく。
C氏	話しかけてもらえる雰囲気作りや温かみ、少しおせっかいしてあえて話を聞いたりちょっと突っこむ。	<b>自分のアプローチを見つけて、視点を大きく変えた。</b> 気持ちに余裕が出来た。A代表が普段から仕事で上手くいかない事が多く、しゃあないと思えるようになった。	<b>広報関係の整理が出来ていない。</b> ミシンの使い方を分かりやすくする。泉北ラボの居場所としてのホームページが無い。	<b>陳列を見える化して</b> 、チラシを持って帰ろうと思ってもらう。貸出料や施設の使い方をより分かりやすくする。
D氏	人見知りのため、初対面の方にいきなり聞けないので、挨拶から初めて、雑談をする。人に興味を持って聞く事で自身に当てはまる事がある。	A代表の存在が大きかった。考え方、口角を上げることを指摘された。 <b>支援してるつもりが支援されていて</b> 、元気をもらうことが多かった。	回答なし	回答なし
E氏	<b>自然体でいられる事。</b> 普通である事。素直に思ったことを伝える。無理に分かる必要はない。	<b>集まれる場所がある事がすごく大事と気づいた。</b> A代表の経営姿勢を間近で見れたことで、経営視点を持つことが出来た。	コミュニティフリッジの支援者の意見を聞く必要がある。	寄付者を増やす。
F氏	コーディネーターやボランティアは役割を沢山設ける。 <b>居場所と役割はセット</b> で考えている。			

## 2.3.ヒアリング調査による運営組織の分析

### 運営スタッフの意義と課題

#### 意義

1. 日替わりでコーディネーターが変わることで、利用者にとっての新鮮さや関心を保ち、地域のつながりを多様に広げる役割を果たしている事が分かった。
2. 利用者にとって泉北ラボが単なる「施設」ではなく「さまざまな人が集い、共有できる場所」であるという認識を促し、リピーターの増加や地域全体の関係人口の拡大に寄与している。

#### 課題

1. コーディネーター同士が情報を共有する仕組みや、**継続的な引き継ぎのシステム**が必要である。しかし、現状では人的リソースの制約もあり、すべての情報を完璧に共有することは難しい。
2. 各コーディネーターが**利用者の様子や発言を記録**し、他のコーディネーターと共有するなど組織的な工夫が求められている。

# 目次

第1章：序論



第2章：泉北ラボの運営組織の実態調査



第3章：イベント利用時における空間利用の実態調査



第4章：カフェ併設型コミュニティフリッジの現状と課題



第5章：結論



## 3.1. レンタルスペースを活用したイベント概要



介護美容ケアビューティー体験会  
(地域のための会)



編み物教室  
(趣味会)



美容セミナー  
(勉強会)

### 7月から10月のイベント概要

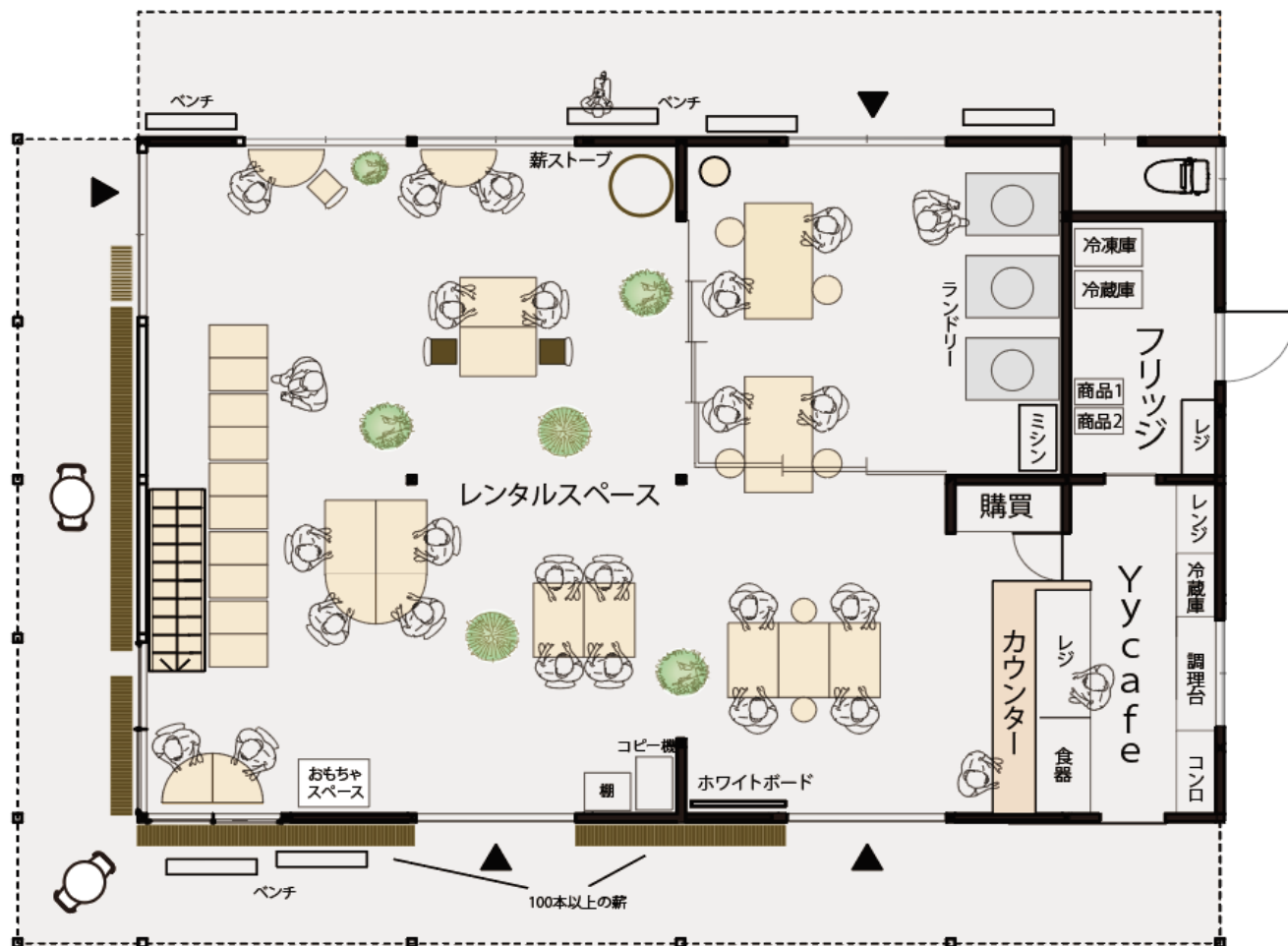
イベントタイプ	イベント名	実施頻度	1回の参加人数	参加費
地域のための会	介護美容ケアビューティー体験会	月2回	9	有料
	きみの森 (フリースクール)	月1回	4	有料
	子育て子育て相談会	月2回	不明	無料
	発達に課題のある子の進路選択	単発	24	無料
	南大阪を奏でる会 上沼健二	単発	40	無料
趣味会	編み物教室	月3回	7.5	有料
	筆ペン教室	月3回	5	有料
	ポジャギアートレッスン	月1回	2	有料
	己書 幸座	月1回	3.5	有料
	石けんづくり	月1回	2	有料
	堺PECS同好会	月1回	10	有料
勉強会	美容セミナー	月1回	7	有料
	FP3級資格講座	月2回	4	有料
	法律相談会	月1回	13	無料

## 3.2.空間配置と設え

18

### 通常時の1階平面図

- ・ テーブルや椅子は自由に組み替えが可能。
- ・ 壁を極力少なくする事で広場のような開放感を生み出している。
- ・ 時計がない、トイレの場所が分かりづらい。  
→利用者が**コーディネーターに場所を聞く事で会話が生まれる**きっかけになる。



通常時の1F平面図 1/100



## 3.2.空間配置と設え

19

### 介護美容ケアビューティー体験会（地域のための会）



介護美容ケアビューティー体験会はネイルケア、ネイルカラー、ハンドトリートメントを体験でき、予約不要、年齢、性別関係なく参加出来る。時間は10:30~14:30。

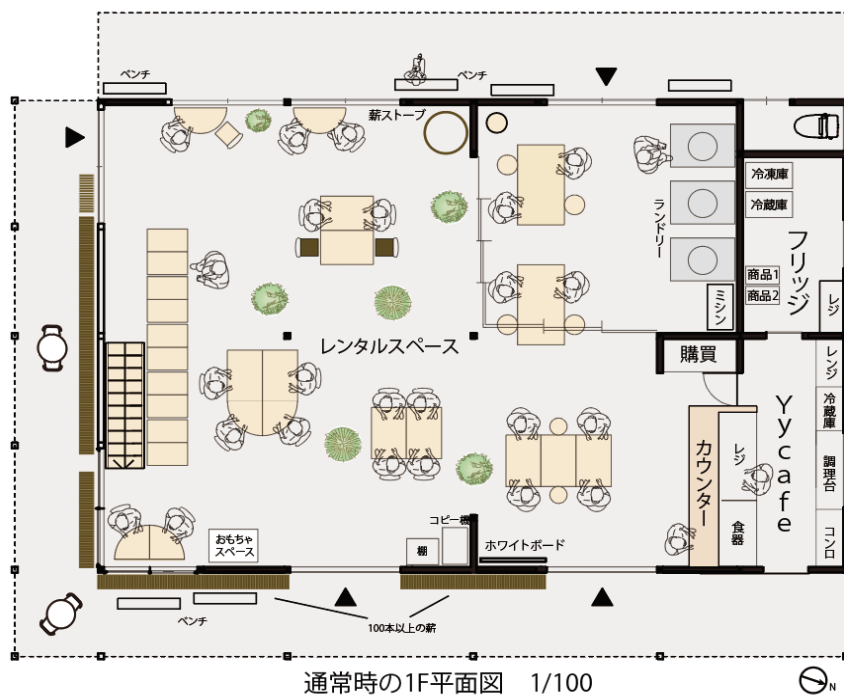
主催者のG氏は**ただネイルをするのではなく、体験中に利用者の生活での困りごとや悩みを聞く事**を大事にしている。現在は活動するだけでなくコーディネーター会議に参加するなど、**コーディネーターとしての役割**を果たしている。



## 3.2.空間配置と設え

20

### 介護美容ケアビューティー体験会の配置



- ・ 左上側の家具のみ変わっており、ネイル担当はいつもG氏とアシスタントの2人で、利用者も2人まで参加できる。
- ・ 利用者は高齢者の夫婦、中年男性、男子大学生、先生が参加されており、**リピーター**であることが分かった。





# 目次

第1章：序論



第2章：泉北ラボの運営組織の実態調査



第3章：イベント利用時における空間利用の実態調査



第4章：カフェ併設型コミュニティフリッジの現状と課題



第5章：結論

## 4.1.コミュニティフリッジの概要

### 泉北コミュニティフリッジ

#### 定義

- ・地域住民が食品を持ち寄り、必要な人が自由に利用できる共有型の冷蔵庫。
- ・地域住民同士が関わり合い、**お互い様の精神**が芽生える環境を提供している。

#### 寄付者と支援者

- ・寄付者は**40-60代の女性が多い**。段ボールに大量の寄付品を持ってこられる方が多い
- ・支援者は、**現在約200人**。寄付者より支援者が多いので、寄付品は現状足りない。



食料品



日用品（石けんや洗剤）



仕分けられたお菓子

#### 利用資格

- ①子育て中の世帯
- ②児童扶養手当or就学援助を受給されている。

→**2つの資格を両方満たす方**が対象。

#### 寄付品

- ・食料品は未開封、消費期限が長い物は可能
- ・日用品は石けんや洗剤が対象。
- ・直接持ってきてもらい、コーディネーターが対応する。

## 4.2.ヒアリング調査による運用状態

### 宝楽代表とコーディネーターらへのヒアリング結果

	現状と事実	課題・改善点
A 代 表	提供しているサービスの花びらの1つであって欲しい。 <b>小規模でありながら多機能な面を果たしている。</b>	泉ヶ丘ひろば専門店街で開催されるつながるdaysに参加したり、寄付を増やすためのプランを立てている。
B 氏	利用者をこれまでに1番近くで見ている。朝方と夕方にサラリーマンらしい方がよく訪れる。	回答なし
C 氏	フリッジ登録を勧めるが、利用資格に当てはまらない方に対して行政への繋げ方や支援の相談が難しい。	<b>広報活動。冷凍庫や冷蔵庫下の段を上手く活用できていない。</b> また利用者との接点がないからアンケートをとる。
D 氏	フリッジを利用しており、大きな感謝をしている。また、支援するつもりが支援されている側でもあった。	支援を受ける側は抵抗感があることから、辛い時は頼ることも大切である。支え合いの仕組みが出来れば良い。
E 氏	24時間空いてる事はいいことである。一方で <b>本当に困っている貧困世帯は簡単に取りに来れるほど余裕はない。</b>	絶対必要な場所で、活気的ではあるが、 <b>スマホロックが難しい方もおられるから、簡単には上手くいかない。</b> 地域に上手く広まっていくと良い。
F 氏	受益者を元気づけると、寄付側に回せられる。なので、受益者が減れば、社会がより生き生きする。	<b>施す側の目線だけではフリッジの良さや悪さが分からない</b> から、本当のフリッジの良さは施される側の意見である。まずは寄付者に対して感謝の気持ちの伝え方を考える。



## 4.2.ヒアリング調査による運用状態

### コミュニティフリッジの現状と改善点

#### 現状

1. 利用者であるD氏はフリッジを利用することで、自身が支援されている側にいてると実感した。
2. 一方で機能があっても実際は本当に**苦しい生活をしている方が簡単にフリッジを利用できるほど上手くはっていない**という意見もあった。
3. 寄付品が増えれば困難な方のサポートは潤うかもしれない

→なぜその方がそのような困難な状況に陥っているのか真剣に議論すべきである。

#### 改善点

1. 法人に力を入れる活動を行う。**地域の家庭菜園をしている方と連携**し、野菜を置く。
2. 寄付したことでコーディネーターは気持ち満たされて当たり前と思っている。一方で支援者はそれ以上の感謝があり、ギャップが生じているのではないかな。

→フリッジの利用者にアンケートの実施、電話をする機会を設ける。

# 目次

第1章：序論



第2章：泉北ラボの運営組織の実態調査



第3章：イベント利用時における空間利用の実態調査



第4章：カフェ併設型コミュニティフリッジの現状と課題



第5章：結論

# 本論文の総括

## 第2章：運営実態の調査

- ・ 設立前~現在までA代表を中心に開放的な広場として試行錯誤しながら運営が続いていた。
- ・ 運営スタッフは、特別な専門知識や資格を超えた「普通さ」と「生活者の感覚」を持ち、日常生活の視点から利用者と同じ目線で交流することで信頼関係を築いていた。

→ 泉北ラボは、「花びらのように広がる支援」という理念のもと、地域住民が主体的に関わり、コミュニティの連帯感を育む場として機能していた。

## 第3章：イベント時の空間実態調査

- ・ 自由度の高い空間設計により、利用者は「ただそこにいるだけで心地よい」という心理的効果を感じることができ**第二の「居場所」**として認識するようになっていた。
- ・ 家具の自由配置等、利用者がリラックスして過ごせる工夫が随所に施されていた。
- ・ 明るい自然光が差し込む空間により、開放感と適度なプライバシーが確保されていた。

## 第4章：コミュニティフリッジの運用状態

- ・ 支援者と寄付者は実際はあまり繋がっていないことが分かった。
- ・ 支援者を助けて寄付側に持っていくことが重要である。寄付者が安定していても支援者が増えていくといつまでたっても変わらない。
- ・ コーディネーター会議は、コミュニティフリッジの**支援者を管理係、寄付者をコーディネーターにする**案があった。

## 本論文の総括

本研究では、泉北ラボの運営実態に焦点を当て、その特異な運営方針や地域への影響について考察した。

- ・「花びらのように広がる支援」は、**物理的な支援にとどまらず、社会的つながりの提供や住民の自己効力感の向上を意図**しており、地域コミュニティの持続的発展に向けた設立背景を反映している。
  - ・施設の運営方針や運営スタッフの「普通さ」といった要素が、利用者にとって居心地の良い空間を生み出し、**信頼を基盤としたソーシャルキャピタル**が形成されている。
  - ・自走型自治のモデルとして発展していくために、**地域に根ざしながらも外部の大学生や企業サポーターを取り込む**ことで、人的資源の安定化が必要である。
- 泉北ラボは、**従来の公民館の枠を超え、地域の課題に対応しながらコミュニティを再構築する可能性を持った私設公民館のモデルとして、新しい自治の在り方を提案しているといえる。**



## 参考文献

---

1. 張 海燕, 柏原 士郎, 吉村 英祐, 横田 隆司, 飯田 匡 : 新千里東町の「ひがしまち 街角広場」の利用実態と利用者意識について : 高齢社会に対応したコミュニティ施設の整備手法に関する研究 , 日本建築学会計画系論文集, 70 巻, 589号, p.25-32, 2005 年
2. 田中 康裕, 鈴木 毅, 松原 茂樹, 奥 俊信, 木多 道宏 : 日々の実践としての場所のしつらえに関する考察 : 「ひがしまち街角広場」を対象として, 日本建築学会計画系論文集, 72巻, 620 号, p. 103-110 , 2007年
3. 田中 康裕, 鈴木 毅, 松原 茂樹, 奥 俊信, 木多 道宏 : コミュニティ・カフェにおける「開かれ」に関する考察 : 主(あるじ)の発言の分析を通して, 日本建築学会計画系論文集, 72巻, 614 号, p. 113-120 , 2007年
4. 田中美莉 : コミュニティスペースが地域に与える影響について-泉北ニュータウンの泉北ラボを事例に -, 武庫川女子大学卒業論文, 2023年
5. 宝楽陸寛 : まちの家事室「泉北ラボ」を起点にコロナ渦の「見えない孤立」に挑む、自走型自治モデル報告2021-2023, 2023年

# ニュータウンにおける自走型自治を目指す 私設公民館「まちの家事室・泉北ラボ」の運営実態の把握

浦井ゼミ 2111910169 大石 悠斗

## 1. 研究背景・方法

### 1.1. 研究の背景と目的

日本のニュータウンは、高度経済成長期における急速な都市化と人口増加に対応して計画的に開発された。しかし、現代においては住民の高齢化や地域コミュニティの希薄化といった深刻な課題が顕在化している。これに対応するため、多摩ニュータウンの「福祉亭」や千里ニュータウンの「街角広場」など、地域コミュニティの再生を目指すさまざまな取り組みが進められている<sup>1)</sup>。

一方、泉北ニュータウンでは、地域住民が自主的に設立・運営する私設公民館「まちの家事室・泉北ラボ」が注目を集めている。泉北ラボは、多世代の交流を促進し、住民が主体的に地域課題に取り組む「自走型自治」を支える拠点として機能している。本研究では、泉北ラボの運営実態を明らかにするとともに、「自走型自治」の意義、その実現に向けた課題、および可能性について探求することを目的とする。

### 1.2. 研究の方法

泉北ラボの運営スタッフに対するインタビュー調査、現地での参与観察、関連文献のレビューのデータを基に、泉北ラボの地域社会における役割を分析し、「自走型自治」の課題とその展望を明らかにする。

## 2. 泉北ラボの運営組織の実態の把握

### 2.1. 運営実態の概要

泉北ラボは2022年1月に設立された施設であり、コーディネーターおよび財団乗組員によって運営されている。

表1：泉北ラボの施設概要

所在地	大阪府堺市高倉台1丁2-1
開設日	2022年1月17日
営業日	月曜日～土曜日の9:00～18:00
施設	Yyカフェ、ランドリー、まちライブラリー、レンタルスペース、コミュニティフリッジ
運営主体	公益財団法人「泉北のまちと暮らしを考える財団」
来訪者	地域住民6割、学生2割程度
設立経緯	地域の社会的孤立を解決するために、ヒト・モノ・コトが会おう広場的な空間を目指している

運営スタッフは施設の日常的な管理業務を行う一方で、利用者の動向やニーズを把握し、それに対応する柔軟な取り組みを行っている。泉北ラボの運営方針は、住民の多様なニーズに応えるとともに、支援する側とされる側の境界を取り払い、地域コミュニティの一員として相互に繋がり合える場を創出することを目指している。このような柔軟な運営方針は、利用者との関係性を強化する重要な役割を果たしている。

### 2.2. コーディネーターが果たす役割

泉北ラボにおけるコーディネーターの役割は、利用者のニーズに柔軟に対応し、施設を利用する人々に安心感と居心地の良さを提供することである。具体的な活動内容としては、利用者との日常的な会話やちょっとした発言を丁寧に拾い上げ、そこから利用者の抱える課題や潜在的なニーズを把握することが挙げられる。また、泉北ラボでは、コーディネーターがその場の状況に応じた臨機応変な対応を行うことを重視している。これにより、利用者が必要とする支援が自然に提供され、利用者自身が地域活動に積極的に関与できる環境が構築されている。



図1：泉北ラボ設立の時系列

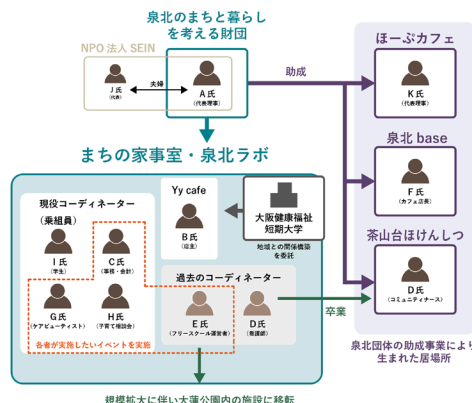


図2：運営組織の関係

### 3. イベント利用時における空間利用の実態調査

#### 3.1. 空間設計の特徴

本空間の設計は、地域住民が自然と集まりやすく、互いに顔を合わせて交流を促進できる場を目指している。そのため、家具配置や空間の開放性において、利用者同士が自然と視線を合わせやすい設計が施されている。

例えば、テーブルや椅子は自由に組み替えが可能で、利用者の人数や用途に応じて柔軟にレイアウトを変更できる仕様となっている。また、壁を極力少なくすることで広場のような開放感を演出し、訪れる人が多様なアクティビティに参加しやすい環境を提供している。

#### 3.2. イベント開催時の空間利用

泉北ラボでは、レンタルスペースを活用したイベントが定期的に開催されている。その一例として、図3(下)に示す「介護美容ケアビューティー体験会」では、長方形の机ではなく、半径45cmの半円形の机が用いられている。これにより、参加者との距離感を縮め、親密でリラックスした雰囲気を生み出している。さらに、植栽の移動によって視線の交錯を避けつつも、利用者同士が互いの存在を感じられる空間が構築されている。このような空間設えにより、読書や作業をしている利用者も快適に過ごすことができるよう配慮されている。例えば、コーディネーターが「今日はにぎやかですみませんね」と声をかけることで、利用者との調和を図り、イベント利用時の環境と個々の利用者の活動が共存する場を実現している。

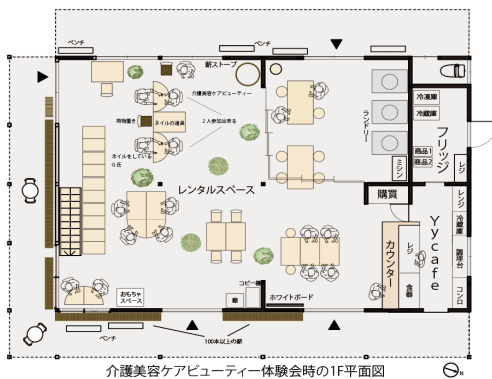
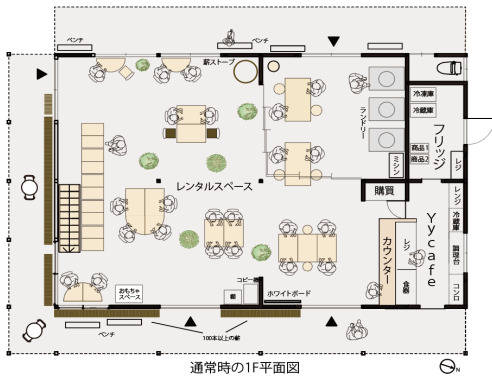


図3：通常時とイベント時の平面図

### 4. カフェ併設型コミュニティフリッジの現状と課題

コミュニティフリッジは、地域住民に対して食材を無料で提供することで生活支援を行うとともに、日常的に訪れるきっかけを創出する役割を果たしている。過去の利用者D氏は、「支援のありがたみを感じ、困ったときはお互い様という意識が芽生えた」と述べており、コミュニティフリッジが支援を受けた人々にとって大きな安心感をもたらしていることが分かる。一方で、寄付品の不足や支援を受ける側の声を十分に汲み取れていないといった課題も明らかになった。

表2：コミュニティフリッジに対するヒアリング結果

	現状と事実	課題・改善点
A代表	提供しているサービスの花びらの1つであって欲しい。小規模でありながら多機能な面を果たしている。	泉ヶ丘ひろば専門店街で開催されるつながるdaysに参加したり、寄付を増やすためのプランを立てている。
B氏	利用者をこれまでに1番近くで見ている。朝方と夕方にサラリーマンらしい方がよく訪れる。	回答なし
C氏	フリッジ登録を勧めるが、利用資格に当てはまらない方に対して行政への繋げ方や支援の相談が難しい。	広報活動。冷凍庫や冷蔵庫下の段を上手く活用できていない。また利用者との接点がないからアンケートをとる。
D氏	フリッジを利用しており、大きな感謝をしている。また、支援するつもりが支援されている側もあった。	支援を受ける側は抵抗感があることから、辛い時は頼ることも大切である。支え合いの仕組みが出来れば良い。
E氏	24時間空いている事はいいことである。一方で本当に困っている貧困世帯は簡単に取りに来れるほど余裕はない。	絶対必要な場所で、活気ではあるが、スマホロックが難しい方もおられるから、簡単には上手くいかない。地域に上手く広まっていくと良い。
F氏	受益者を元気づけると、寄付側に回せられる。なので、受益者が減れば、社会がより生き生きする。	施す側の目線だけではフリッジの良さや悪さが分からないから、本当のフリッジの良さは施される側の意見である。まずは寄付者に対して感謝の気持ちの伝え方を考える。

### 5. 結論

本研究では、ニュータウンにおける私設公民館として運営される「泉北ラボ」に焦点を当て、その運営実態や地域社会に与える影響について考察した。泉北ラボは、「花びらのように広がる支援」という理念のもと、利用者同士が気軽に接触できる仕組みを備えており、多様な利用者層を受け入れる場となっている。そして、そこでは「リンクワーカー」の役割を果たすコーディネーターが、住民が日常的に集う場を提供し、その過程で自然発生的な信頼関係を築いている。このような、コーディネーターの「普通さ」や親しみやすさといった要素が、利用者にとって居心地の良い空間を生み出し、信頼に基づくソーシャルキャピタルの形成に寄与している。このことから、泉北ラボは、従来の公民館の役割を超え、地域の課題に柔軟に対応しながらコミュニティを再構築する可能性を秘めた私設公民館のモデルだと言える。

#### 参考文献

- 1) 張海燕, 柏原士郎, 吉村英祐, 横田隆司, 飯田匡: 新千里東町の「ひがしまち街角広場」の利用実態と利用者意識について: 高齢社会に対応したコミュニティ施設の整備手法に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 70巻 589号 p. 25-32, 2005
- 2) 余錦芳, 松本真澄, 上野淳: 多摩ニュータウン高齢者支援スペース・福祉利用者の地域生活様態とその地域社会における意義, 日本建築学会計画系論文集, 77巻 679号 p. 2025-2034, 2012

2024 年度 卒業論文

ニュータウンにおける自走型自治を目指す私設公民館  
「まちの家事室・泉北ラボ」の運営実態の把握

建築学部 建築学科 浦井ゼミ

21-1-191-0169

大石悠斗



# 目次

## 第1章 序論

1-1. 本研究の背景・目的	1
(1) 研究背景	
(2) 研究目的	
1-2. 既往研究と本研究の位置づけ	2
(1) 既往研究について	
(2) 本研究との位置づけ	
(3) 調査対象地について	
1-3. 研究方法	3
(1) 泉北ラボの運営組織の実態の把握	
(2) イベント利用時の空間の使われ方の実態調査	
(3) カフェに併設されたコミュニティフリッジの運用状態	
1-4. 本論文の構成	4

## 第2章 泉北ラボの運営組織の実態の把握

2-1. 本章の目的	5
2-2. 泉北ラボの設立前から現在までの運営背景	5
(1) 設立の背景	
(2) 現在までの運営組織の関係	
(3) 「泉北のまちと暮らしを考える財団」	
(4) 主であるA代表の経歴	
(5) 利用者の実態	
(6) 施設概要	
2-3. 調査方法	13
2-4. 施設内にあるモノの使用状況	14
2-5. 泉北ラボの運営スタッフ「コーディネーター」と「乗組員」の概要	16
(1) コーディネーターの概要	
(2) 乗組員の概要	
2-6. ヒアリング結果	16
(1) ヒアリング対象者の活動経緯と目的	
(2) 活動を通して意識していること、変化したこと	
(3) 泉北ラボの課題と改善点	
(4) 運営スタッフの意義と課題	

第3章 イベント利用時の空間の使われ方の実態調査	
3-1. 本章の目的	21
3-2. 調査方法	21
3-3. レンタルスペースを活用したイベント	21
(1) イベント概要	
(2) イベントの利用人数と日程	
3-4. イベント時の空間の設え	23
(1) 空間設計の特徴	
(2) 介護美容ケアビューティー体験会	
(3) 介護美容ケアビューティー体験会と視察の同時の空間状況	
第4章 カフェに併設されたコミュニティフリッジの運用状態	
4-1. 本章の目的	29
4-2. コミュニティフリッジの概要	29
(1) コミュニティフリッジの定義	
(2) 泉北コミュニティフリッジ	
(3) 寄付者	
(4) 支援者	
4-3. 調査方法	30
4-4. ヒアリング結果	31
(1) 泉北コミュニティフリッジの設立背景	
(2) 利用頻度	
(3) コミュニティフリッジに対する活動内容	
(4) コミュニティフリッジの現状と事実	
(5) コミュニティフリッジの課題と改善点	
第5章 結論	
5-1. 各章のまとめ	34
(1) 泉北ラボの運営実態の調査	
(2) イベント利用時の空間の使われ方の実態調査	
(3) カフェに併設されたコミュニティフリッジの運用状態	
5-2. 結論	36
参考文献一覧	
資料編	

## 第 1 章

### 序論

## 1 章 序論

### 1-1. 本研究の背景・目的

#### (1) 研究背景

日本のニュータウンは、高度経済成長期における急速な都市化と人口増加に対応するため、1960年代から開発が進められてきた。これらのニュータウンは当初、都市部の人口密集を解消する役割を果たし、住民に快適な生活環境を提供してきた。しかし、開発から数十年が経過し、現在では住民の高齢化、施設の老朽化、地域コミュニティの希薄化といった深刻な課題に直面している。

泉北ニュータウンも例外ではなく、特に住民の社会的孤立や地域コミュニティの活力低下が顕著になっている。こうした背景の中で、地域住民の交流を促進し、孤立を解消する新たな地域づくりの取り組みが必要とされている。実際に、多摩ニュータウンの「福祉亭」や千里ニュータウンの「街角広場」など、他のニュータウンでは、地域住民のつながりを取り戻すためのさまざまな試みが行われてきた。しかし、これらの施設も運営面や地域参加の持続可能性という課題に直面し、運営を終了するケースも見られている。

このような状況の中、泉北ニュータウンでは「まちの家事室・泉北ラボ」が注目されている。泉北ラボは、住民主体で設立された私設公民館として、地域住民が自主的に運営し、多世代が交流する場を提供している。地域課題を解決する拠点として、住民主導の「自走型自治」の実現を目指しており、その独自の運営モデルは他地域への波及可能性を持つと考えられる。

#### (2) 研究目的

泉北ラボは地域住民が主体的に運営し、多世代が交流する場として注目を集めており、行政主導の地域運営から脱却し、住民自身が地域の未来を築くことを目指している。このような自発的な活動が今後のニュータウン活性化の新たな可能性として研究することは意義がある。本研究では、泉北ラボの運営実態を明らかにし、自走型自治の実現に向けた課題と可能性を探ることを目的とする。

具体的には、泉北ラボが地域コミュニティの活性化や住民の社会的孤立の解消にどのように寄与しているのかを明らかにし、住民主導のコミュニティ施設が地域社会における課題解決にどのように役立つかを考察する。



## 1-2. 既往研究と本研究の位置づけ

### (1) 既往研究について

#### 居場所の利用実態調査に関する研究

・張 海燕らの研究<sup>1)</sup>では高齢社会に対応したコミュニティ施設の整備手法に関して述べられている。「ひがしまち街角広場」の利用者像、利用者の存在意義が示されており、今後は若年層の利用が開拓する必要があると意義されている。また、余 錦芳らの研究<sup>2)</sup>は、「福祉亭」の活動と利用実態の調査の研究をしている。利用者の属性を「依存型」、「悠々型」、「活発型」と分類し、生活像を概説している。

#### コミュニティカフェの設えに関する研究

・設えに関する研究は、田中康裕らの研究<sup>3)</sup>で述べられている。設えに関する研究では、あらかじめ全てが設えるのではなく、運営を通して徐々に設えていくと意義されている。また、設えは客である地域住民によって規定されていると説明している。

#### 運営側からの視点による研究

・田中康裕、鈴木毅<sup>4)</sup>らの研究では、{場所での「開かれ」を考えるときに、カフェの運営に継続的に関わっている主が存在し、その主がカフェ内外で築いている関係とその関係のあり方が、その場所の「開かれ」につながっている側面がある}と明かしている。また、「主のような人物が内外で関係を築いていなければ、カフェとしての継続することはない」とも述べている。

### (2) 本研究との位置づけ

これらの既往研究で分かったことは、居場所として成り立っていく為には主のような存在が不可欠で、主が変わっていても違う主のやり方で継続していく必要がある。以上の背景から主と運営スタッフの関係性を示し、主と出会ってどのような変化を生みだしているのか、運営スタッフが日頃からどういう意識で活動しているのかを把握する。

また、泉北ラボの運営での変化を明らかにし、地域の課題に対応しながらコミュニティを再構築する可能性を持った私設公民館のモデルとして、新しい自治の在り方を明確にすることを目的とする。

### (3) 調査対象地について

本研究では、近年地域活動が盛んに行われている泉北ニュータウンの泉ヶ丘地区を調査エリアとする。その中でも社会課題に向き合うため試行錯誤し、意図されて建てられた泉北ラボを対象とする。

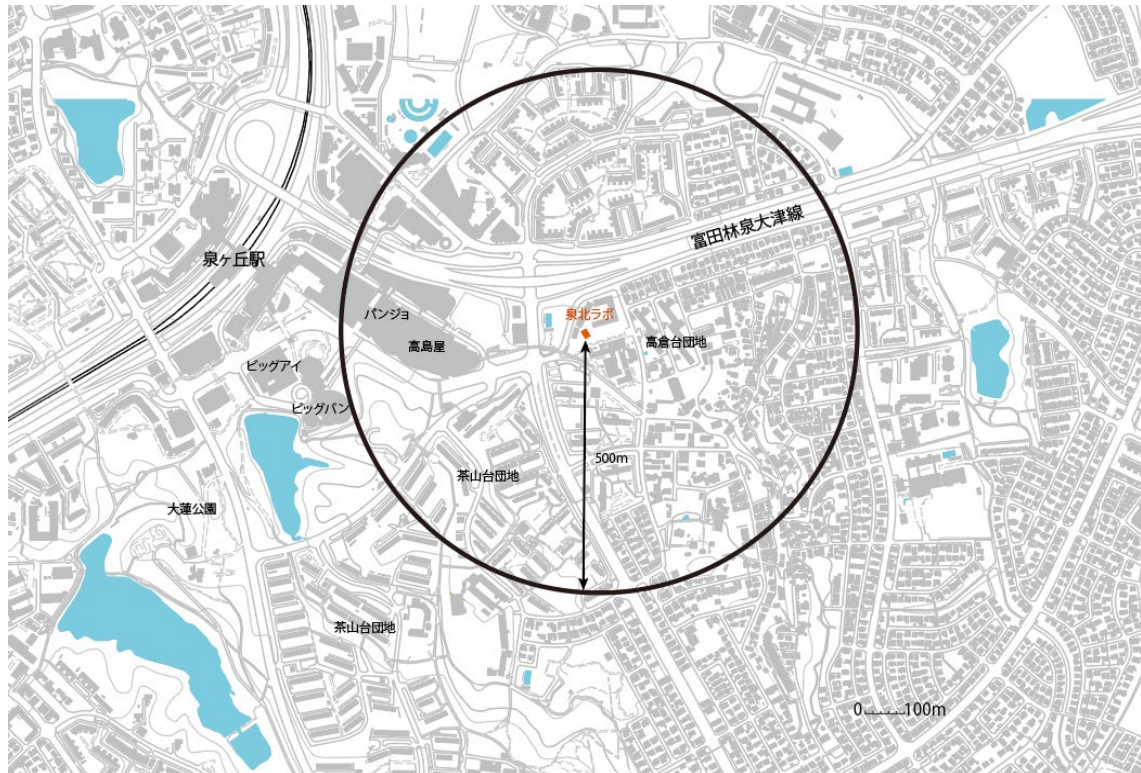


図 1 泉北ラボ 500m圏内配置図

### 1-3. 研究方法

運営スタッフへのヒアリング調査、筆者自身が泉北ラボのボランティア活動の一環として参与観察、関連文献のレビューを組み合わせる。

#### (1) 泉北ラボの運営組織の実態の把握

意図して建てられた泉北ラボの設立背景、特徴、独自性を把握し、滞在する人との関係を築いていく。そして、日々行われている運営状況や利用者の実態を運営スタッフにヒアリング調査する。

#### (2) イベント利用時の空間の使われ方の実態調査

定期的に行われるイベントの概要、特徴を把握し、どのような形で地域に貢献しているのかを明らかにすることを目的とする。また、通常時とイベント時で空間の設えがどのように変化しているか考察する。

### (3) カフェに併設されたコミュニティフリッジの運用状態

泉北ラボの機能の1つであるコミュニティフリッジの現状と課題を調査する。泉北コミュニティフリッジは居場所と併設して運営している所が大きな特徴であることから、寄付者と支援者が単なる物々交換だけでなく、それ以上の繋がりがあるのではないかと仮説し、明らかにすることを目的とする。

#### 1-4. 本論文の構成

本論文の構成は、第5章で構成されている。

第1章は序論で、研究背景、目的、方法について述べる。

第2章は泉北ラボの運営実態の概要を述べている。

第3章はイベント利用時の空間の使われ方の実態調査を述べている。

第4章はコミュニティフリッジの運用状態を述べている。

第5章は結論である。

#### 本章の参考文献

- 1) 張 海燕, 柏原 士郎, 吉村 英祐, 横田 隆司, 飯田 匡:新千里東町の「ひがしまち街角広場」の利用実態と利用者意識について:高齢社会に対応したコミュニティ施設の整備手法に関する研究 日本建築学会計画系論文集、2005年70巻589号 p.25-32
- 2) 余 錦芳, 松本 真澄, 上野 淳:多摩ニュータウン高齢者支援スペース・福祉亭利用者の地域生活様態とその地域社会における意義 日本建築学会計画系論文集、2012年77巻679号 p.2025-2034
- 3) 田中 康裕, 鈴木 毅, 松原 茂樹, 奥 俊信, 木多 道宏:日々の実践としての場所のしつらえに関する考察:「ひがしまち街角広場」を対象として 日本建築学会計画系論文集、2007年72巻620号 p.103-110
- 4) 田中 康裕, 鈴木 毅, 松原 茂樹, 奥 俊信, 木多 道宏:コミュニティ・カフェにおける「開かれ」に関する考察:主(あるじ)の発言の分析を通して 2007年72巻614号 p.113-

## 第 2 章

### 泉北ラボの運営組織の実態の把握

## 第2章 泉北ラボの運営組織の実態の把握

### 2-1. 本章の目的

本章では、泉北ラボの設立に至るまでの背景、現在の活動内容、運営組織の実態を調査する。運営スタッフへのヒアリング調査、現地での参与調査、関連文献の組み合わせから泉北ラボの取り組みの独自性を明らかにすることを目的とする。

### 2-2. 泉北ラボの設立前から現在までの運営背景

#### (1) 設立の背景

泉北ラボは、ヒト、モノ、コトが会う広場的な空間を目指したコミュニティ施設である。設立は2022年1月でコロナウイルスが蔓延していた時期に建てられた場所である。地域内での新しい資金循環を下支えする機関として、公益財団法人「泉北のまちと暮らしを考える財団」(以下、泉北財団)により設立された。場所は、大阪府堺市高倉台1丁目にあり、高倉台西小学校が廃校となった跡地である。泉北財団が出来たのは、2020年2月で泉北ニュータウンにおける地域活動が始まったが、コロナウイルスの影響で活動が止まった。そこで泉北ニュータウン内の小学校PTAの協力を得て、コロナウイルス対策に関する子供や保護者への影響についてアンケート調査を実施した。<sup>1)</sup> その結果、約半数の家庭が1人で子育てしておられ、保護者の78%が悩みや困りごとを誰かに相談したいと回答した。また、相談をする相手が家族、親戚、友人、近所の人が多く、行政や自治会を頼りにする割合が少なかった。これらの課題に対処するために話し合いが始まったが、場所がなかった。そのタイミングで、地域の防災拠点を作りたいという堺市の提案により、跡地に大阪健康福祉短期大学のキャンパスが移転した。大学を置くだけでは地域との連携がうまく機能しないことから、地域連携機能の役割を果たす運営パートナーとして泉北財団が選ばれ、泉北ラボという地域拠点が生まれた。

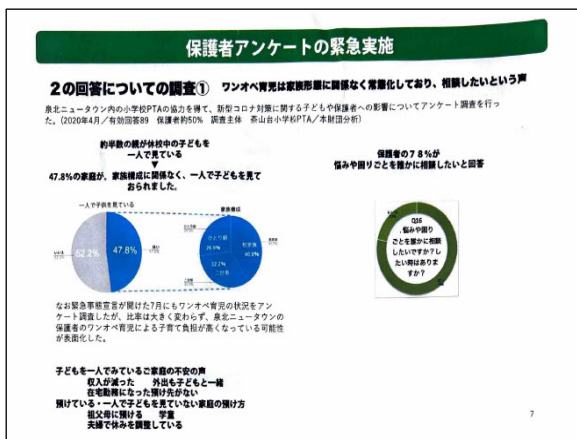


図2-2-1. 保護者の生活環境状況<sup>1)</sup>

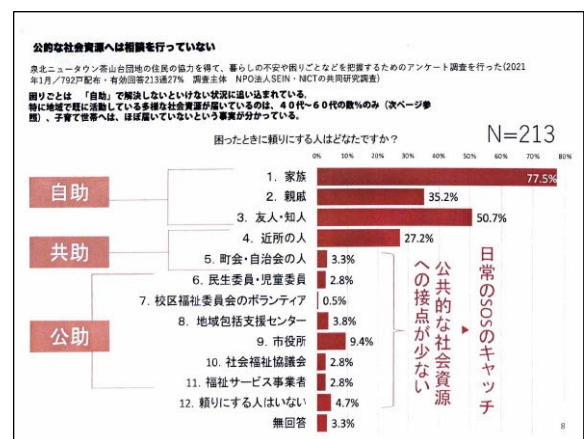


図2-2-2. 困り事の相談相手に関する状況<sup>1)</sup>



## (2) 現在までの運営組織の関係

泉北ラボはA代表を始めとした泉北財団により運営されている。図2-2-3では、泉北ラボの運営スタッフや助成している団体を示している。運営スタッフは現在、乗組員として活動しているA代表、C氏、現役大学生のI氏、Yyカフェを運営しているB氏の4名である。この4名は運営スタッフとして泉北ラボの事務作業や広報活動に勤めている。また、コーディネーターとしての役割も果たしている。利用者の困り事や悩み事、欲しい情報を提供し、色んなサービスを受け入れられるような繋がりを花びらのように増やしていく活動をしている。過去には自身の困りごとがきっかけで勤めたD氏、レンタルスペースを利用してフリースクール活動しながら利用者に寄り添ったE氏がコーディネーターであった。現在は、介護美容ケアビューティー体験会のG氏、子育て相談会のH氏がコーディネーターを勤めている。

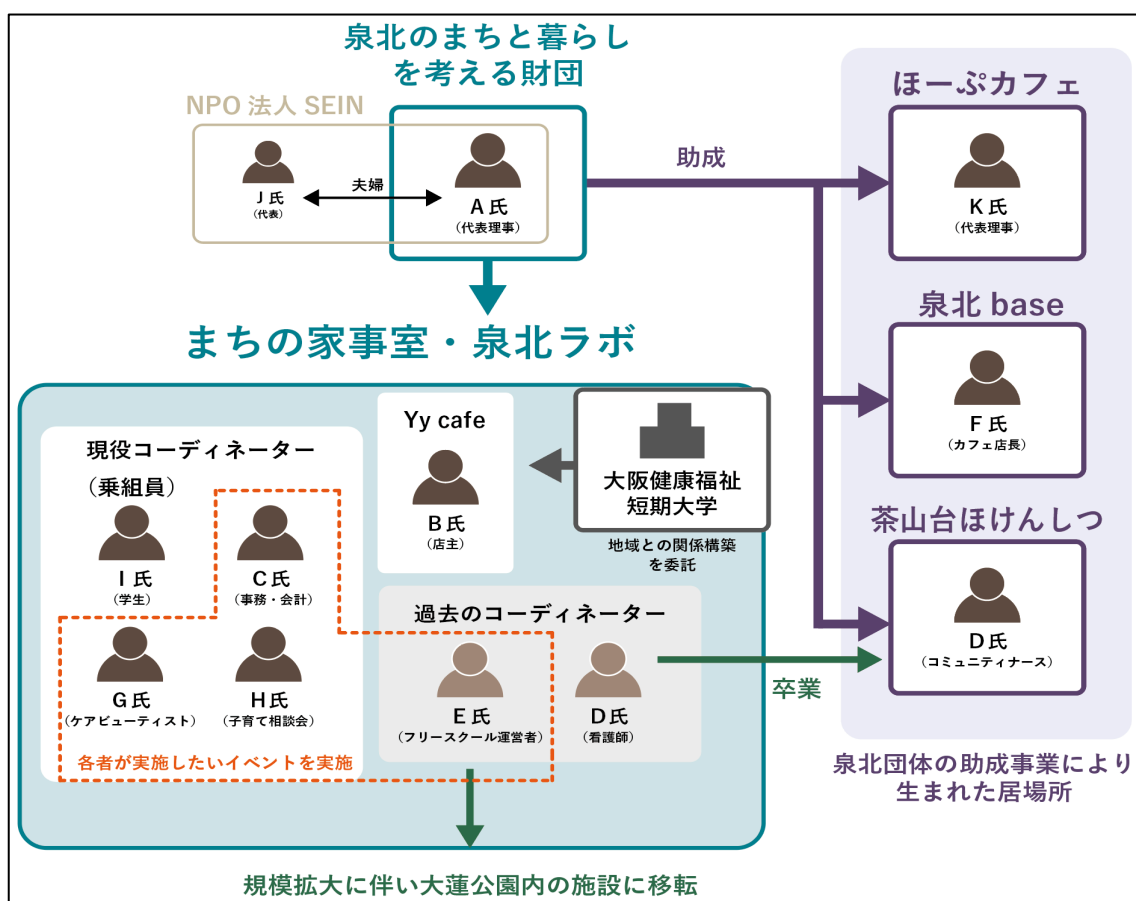


図 2-2-3. 運営組織の関係

図 2-2-4 は、泉北ラボの設立前~設立後の現在までの出来事を示した時系列である。2021 年 5 月にクラウドファンディングを実施して約 2 ヶ月で 300 万円の寄付を集めた。クラウドファンディング後、半年で泉北ラボが設立された。A 代表は、開設前から泉北ニュータウンに関わり続けてきた。A 代表は、「2017 年 12 月に行われた泉北ニュータウン 50 周年事業では、50 年での出来事や活動を振り返った。しかし、未来の話は出なかった。30 年後の町を変えたかった。」と述べており、設立において計画的であることが窺える。

設立後、1 月に E 氏がフリースクール活動を始め、4 月に D 氏がコーディネーターとして運営に携わった。2022 年 10 月に C 氏が利用者として泉北ラボを訪れた際に、A 代表と出会う。A 代表とは約 20 年前から繋がりがあったため、泉北ラボで働くことを勧められていた。1 年半後、C 氏は本格的に泉北ラボの乗組員となり、現在も活動している。

2022 年はコーディネーター会議が開催されていた。コーディネーター会議は、乗組員、コーディネーター、地域に活動に参加されている方が参加する。利用者の困りごとや泉北ラボの今後の活動を議論する会議である。2022 年以降はコーディネーターが不足していたため、会議が開催されていなかったが、2024 年 11 月より再開された。



図 2-2-4. 泉北ラボ設立の時系列

### (3) 「泉北のまちと暮らしを考える財団」の活動内容

泉北財団の本事業は、「泉北ニュータウンの孤立と地域をつなぐ助成事業」である。2019年から始まった休眠預金制度を取り入れ、約1億円のお金を地域の為に動かすことが可能になった。休眠預金を利用してこれまでに「ほーぷカフェ」、「泉北 base」、「茶山台ほけんしつ」の3団体の助成事業を実施した。この活動の特徴として、泉北財団は中間支援組織といえる。しかし、3団体にはその地域での自治会、行政、地域団体と共に実行会議を開くことを条件として助成している。これにより、事業や困りごとを通じて議論する協議体と、住民の参加の機会が生まれてくる。このようなソーシャルキャピタルが地域コミュニティの活性化や持続可能性に大きな影響を与えている。この取り組みは支援者のネットワークを構築し、地域経済が持続的に循環する自治モデルといえる。

これらの背景から、泉北財団の拠点である泉北ラボに焦点を当て、日々の運営内容や活動状況を把握する。

### (4) 主であるA代表の経歴

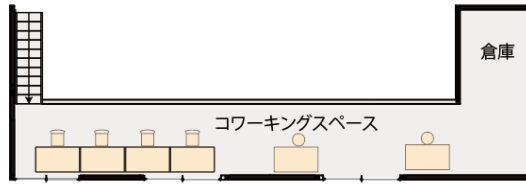
42歳。大阪府河内長野生まれ。現在は、泉北財団の理事長、NPO法人SEINコミュニティLAB所長をしている。このようなまちづくり活動を始めたきっかけは、小学校6年生の欽ちゃんの仮装大賞クラブがあった。本戦に出場を希望していたが、学校のクラブということもありお金がなかった。そのときに地域の方々がクラブ活動に対して面白がられて、支援をしてくれた。結果は準優勝で賞金50万円もらえて豪遊できると思ったが、手元に残ったのがテレホンカード1000円分のみだった。これに対してものすごく怒ったが、地域が貢献してくれたから地域に還元するのは当たり前という地域の親の姿勢が面白いと感じた。その経緯によって、15歳からまちづくり活動を始めた。

大学では経済学を学びながら地域のボランティア活動を続けていく中で、1番の悩みは相談相手がいなかった。役所は興味のない話や管轄外の話には耳を傾けてもらえず、一方で商売人は相談する人がいた。その当時から中間支援がいると感じ、大学卒業後、リクルートに1年働いて今の中間支援の仕事に取り組んでいる。

### (5) 利用者の実態

2023年に武庫川女子大学の田中氏<sup>2)</sup>による泉北ラボの利用者の概要を書いた卒業論文がある。約50人にアンケートをとり利用者の目的や地域活動に対する関心を調査している。また、50代、80代の女性にヒアリング調査をし、泉北ラボに対するヒアリングをしている。結果は、利用者の多くが30、40、50代で高倉台、茶山台に住んでおり地域住民になじんでいることが分かった。また、ヒアリング調査では、泉北ラボに来る前は高倉台の「ティージュ」というカフェに通っていたが、閉店したため泉北ラボに通っている。また、駅前がざわざわしており、好きではないため泉北ラボが唯一気軽に集まれる場所と定義している事が分かった。

(6) 施設概要



2階平面図 1/100



1階平面図 1/100

図 2-2-5. 泉北ラボ 配置図



写真 2-2-1. 外観



写真 2-2-2. 内観

① Yy カフェ

泉北ラボは A 代表の意思が詰まった場所である。A 代表のまちづくりに対する観点から継続性を図るためにビジネスを重要視している。その特徴として、泉北ラボは Yy café というワイワイする場を作りたいという意味で考えられたカフェがあるが、カフェ以外の空間を別事業として分けている。多くのカフェは収益を場所の経営者に負担するが、泉北ラボではカフェでの収入は泉北財団でなく、全て店主である B 氏の利益となっている。一方で B 氏は泉北ラボでカフェを運営させてもらう代わりに場所の家賃を泉北財団に払っている。この仕組みは、B 氏が雇用されるよりお互いが社長同士の関係性でありたいという要望で決まった。なので、宝楽氏、コーディネーターはカフェに関するメニューの作成やコーヒーを入れるといった作業は一切行わない。この関係から、B 氏は収支に関することは良くも悪くもすべて自分の責任であることがわかる。

一方で B 氏はただカフェを運営するではなく、コーディネーターとしての役割を果たしており、利用者の困りごとや相談に対応するといった活動もしている。泉北ラボにはカフェをはじめ、多くの機能を果たしている。



写真 2-2-3. フードメニュー



写真 2-2-4. ドリンクメニュー



写真 2-2-5. Yy カフェ



写真 2-2-6. キッチン



② ランドリー

喫茶ランドリーをモチーフにしたランドリーが6つ配置されている。利用時はコーディネーターに必ず1言声をかける。乾燥 8kg、500 円、目安 2 時間。洗濯 8kg、500 円。目安 1 時間。

③ アイロンミシン

無料。利用時はコーディネーターに必ず1言声をかける。無料



写真 2-2-7, ランドリー



写真 2-2-8. アイロンミシン

④ まちライブラリー

寄付された本が多く置かれている。今は約 200 冊の本がある。



写真 2-2-9.  
まちライブラリー



写真 2-2-10.  
社会課題の本



写真 2-2-11.  
画集や毛布がある

⑤ コワーキングスペース

2F に配置され、1 人で勉強や仕事をするときに使用可能。1 時間 150 円、1 日 1000 円。  
15 分を超えると 1 時間分が追加される。



写真 2-2-12. 階段側



写真 2-2-13. 2F と 1F

⑥ 薪ストーブ

コーディネーターが自ら薪を入れる。



写真 2-2-14. 薪ストーブ



写真 2-2-15. 薪ストーブと外観



### ⑦ レンタルスペース

利用者はいつでも無料で使用できる。コーヒーを飲んだり友人同士会話したり、勉強したりと使い方は様々である。イベント活動や団体で利用したいときに予約として使用料がかかる。



写真 2-2-16. レンタルスペース 1



写真 2-2-17. レンタルスペース 2

### ⑧ コミュニティフリッジ

地域の公共冷蔵庫。泉北ラボに併設されている。寄付品はすべて泉北ラボで受け取り管理している。駐車場側、駅方面からは見えづらい位置に配置されている。



写真 2-2-18. 寄付品



写真 2-2-19. 内観

## 2-3. 調査方法

泉北ラボは小規模ながら一つ一つの場所、モノに対してこだわりがある。カフェの利用状況、ランドリー、まちライブラリー、コワーキングスペースのそれぞれの使われ方を把握する。また、運営者やコーディネーターに泉北ラボの運営状況や活動内容、改善点をヒアリング調査し、設立から現在までの運営の変化を分析する。

## 2-4. 施設内にあるモノの使用状況

### ・ Yy カフェの利用状況

活動日時は月曜日~土曜日。時間は9:00~18:00。ドリンクの人気商品はドリップコーヒー。1日平均8杯ほど。クッキーは1週間に約10~20枚売れる。サンドウィッチは営業前に調理する。売り上げを作るため、ドリンクやご飯だけでなくサンドウィッチで売り上げを作る。ご飯系は、ジャンキーなメニューである。泉北はじいさんばあさん用のメニューが多く、ジャンキーなメニューのお店が少ないためである。毎月3種類提供している。チキンオーバーライスが毎月固定で、残りの2種類が月替わりである。カウンターは3席でお皿の返却口でもある。学生もしくはB氏の知り合いの方が座る。設置した理由は、知り合いの方が来たときに喋れるようにするためである。一般の方はほとんど座らない。昼間はカフェの出入りが多く、カウンターが食器の返却口であふれるため、誰も座っていない。

表 2-4. Yy カフェの運営概要

	Yy カフェ
主/スタッフ	B氏(男性)/B氏のみ
オープン日時	月曜日~土曜日/9:00~18:00
エリア	1階面積の約1/8の大きさ
主なメニュー	・ドリップコーヒー:400円 ・カフェラテ:480円 ・チョコクッキー:160円 ・日替わりサンドウィッチ:300円 ・チキンオーバーライス:650円(学生は500円)
行事・活動	夜カフェ/第2・4金曜日、土曜日 18:00~21:00
来訪者	設立当初は学生の利用が多かった。学生に向けた日替わり弁当を作っていたが、コロナウイルスが落ち着き、地域住民の利用が増えた。よって2024年7月から日替わりではなく、月ごとにメニューを変えている。

### ・ランドリー、アイロンの使われ方

ランドリーを利用している人は高齢者が多く服を洗濯している人は見られず、毛布や布団のカバーを洗濯、乾燥している人が多かった。A代表によると、ランドリーが出来たときは住民に「誰が使うねん」と言われていたが、昨年近くのマンションが工事の影響で洗濯が出来なくなった時に、多くの住民に使用された。それから住民の気持ちが変わった。

一方で、アイロンを利用している人は、参与調査では一度も見られなかった。

#### ・まちライブラリーの本の種類

- ・まちライブラリーとして寄付された本や画集が多く置かれている。
- ・泉北ラボ情報ファイル、NPO、まちづくり関係の本があった。下2段は段ボールに泉北ラボの資料が詰め込まれている。
- ・泉北ニュータウン、団地、ほっとかない郊外、社会的処方の本があった。高齢者の方から寄付された「泉北ニュータウンの建設」はなかなか手に入らないと宝楽氏は述べた。
- ・泉北ラボの模型、宝楽氏による泉北ラボ報告書がある。
- ・シャガール世界美術館、かるたが置かれている。
- ・風の谷のナウシカ、1Q84、社会学、文学の本が置かれている。
- ・知恵、知識がつく本、絵本が置かれていた。
- ・画集、漫画「チ」が置かれていた。漫画の寄付は「チ」が初めてである。
- ・膝掛け、洋楽のCDが置かれている。
- ・まちづくりに関するチラシが置かれている。

これらの結果から、泉北ラボのまちライブラリーは、大人向けの本が点々と配置されている。また、本だけでなく模型や膝掛けのような変わったモノが置かれていた。A代表は、「社会的な本や難しい本をあえて置くことで、カオスな環境になって、それが面白いと思う人もおるんよ笑」と述べた。また、泉北ラボの資料が普通に置かれていることに関しては、「普通に置いていることで、パラッと見てくれたら嬉しい」と述べた。

#### ・コワーキングスペースの使い方

A代表が泉北ラボに滞在しているときはほとんどの場面で使用していた。オンラインミーティングや仕事の資料をパソコンでまとめていた。また、コーディネーターの穂積氏は仕事に集中したい時に使用していた。1階と2階が吹き抜けのため、後ろを振り向くと1階を見わたせる。

#### ・薪ストーブの使用時間

薪ストーブは11月初旬からつけ始められた。朝に火をつけて、昼頃になると消える仕組みになっていた。昼以降は、薪ストーブがなくても外の光が360度入ってくるので、暖かい空間になっている。A代表は、「利用者のなかでは冬は薪ストーブが強力すぎて暑いという意見がある」と述べた。



## 2-5. 泉北ラボの運営スタッフ「コーディネーター」と「乗組員」の概要

### (1) コーディネーターの概要

コーディネーターは、利用者との「世間話」を通じて信頼関係を築き利用者の困りごとや必要な支援を引き出す役割を担っている。施設内で気軽に相談できる雰囲気が醸成され、利用者が自己表現や課題解決に向けて行動しやすい環境が整備されている。

### (2) 乗組員の概要

乗組員は施設の日常的な管理業務を行いながら、利用者の動向やニーズに対応している。また、定期的なコーディネーター会議を開き、利用者のニーズに即した支援策を模索している<sup>2)</sup>。支援する側とされる側が区別されることなく、地域コミュニティの一員としてつながり合える場を創出することを目指している。

## 2-6. ヒアリング結果

泉北ラボの運営に携わってきた方々にヒアリング調査を行い、オープンから現在までの運営状況、コーディネーターが果たす役割やその意識、活動内容を分析し、泉北ラボの自走型自治の仕組みを解明する。ヒアリング対象者は表2-6である。A代表~E氏は泉北ラボの運営スタッフとしてこれまでに活動された方である。F氏は、泉北baseでカフェ店長を勤めながらもコーディネーターの役割を果たしている。直接泉北ラボの運営に関わってはいないが、外から見た運営状況についてヒアリング調査する。調査対象者の選定理由は、オープンからの関係者である方の背景や始めたきっかけが理解でき、現在と過去の違いや共通点を知ることが出来るためである。調査日は2024年10月から2024年12月である。ヒアリングは1人当たり約1時間30分程度行い、ノートとペンを用いて内容を記録した。また、許可を得て会話の内容の録音も行った。

表2-6. ヒアリング対象者

	活動	活動期間	ヒアリングした日
A代表	泉北ラボ代表	設立前~現在	2024年10月25日
B氏	Yyカフェ店長	設立前~現在	2024年12月6日
C氏	財団乗組員	2022年10月~現在	2024年10月24日
D氏	元コーディネーター	2022年1月~10月	2024年10月28日
E氏	元コーディネーター	2022年1月~2022年3月	2024年10月30日
F氏	泉北ラボ外のコーディネーター（泉北base店長）		2024年10月30日

### (1) ヒアリング対象者の活動経緯と目的

A 代表は、地域の子育て世代の社会的孤立をテーマとして、泉北財団で居場所事業を営することを始めた。困った事を場所に置くことで、サービスを受けれるような花びらのような繋がりを増やすことを目的としている。B 氏は、茶山台のやまわけキッチンで場所を借りて食事を提供する活動をした後、泉ヶ丘駅前で飲食店を開こうとしていたが、申請がおりなかった。そのタイミングで A 代表に泉北ラボの話を持ちかけられて、泉北ラボのシェアキッチンとしてカフェ経営が始まった。C 氏は、里山団体の活動で相談するべく、A 代表と数年ぶりに再会する。泉北ラボの人手不足を知りこのような場所が大事と認識し、泉北財団の乗組員として A 代表の秘書的存在になっている。D 氏は、A 代表と話していく中で、自分自身の心を温める事が先にするべきと考えた。コーディネーターとして人と話す機会を増やししながら、社会復帰を目指していった。E 氏は、フリースクール活動をしながらかコーディネーターとして、利用者の困りごとや相談相手になっていた。F 氏は、コーディネーター会議に定期的に参加しており、地域社会に対しての議題を討論していた。

表 2-6-1 泉北ラボでの活動のきっかけ

	経緯	目的
A 代表	子育て世帯は地域や社会の接点が少なく、社会的孤立を感じている人が多くいた。なので、泉北財団で居場所事業を始めた。	日常の接点の中に社会性を感じる場所を併設する。まちな家事室が地域に1つでもあれば変わるといった実験的な目的があった。
B 氏	自身でカフェのお店を開こうとしていたが難しいと思っていたタイミングで、A 代表から声をかけられて始めた。	30 歳を目安に自身がやりたかった飲食店を、色んな人が混じり合う場所であるカフェとして経営する。
C 氏	自身が里山団体の活動をしており、泉北ラボで、A 代表に相談した。人手不足であったため、2024 年 4 月から始めた。	A 代表が多忙であるため、秘書的役割を果たしている。また、今後は施設周りにガーデンを作る計画を立てている。
D 氏	夫を亡くし、死別した 1 人親の会を立ち上げるために、A 代表に相談した。しかし、自身がまだ辛い状況であることを再確認した。	A 代表の暖かさを感じ取り、まずは自身が社会復帰するべきと考えた。よって、コーディネーター活動を始めた。
E 氏	フリースクール活動をしていたが、開催場所に困っていた。A 代表に使っていいよと言われ、泉北ラボで活動するようになった。	ただ活動するだけでなく、コーディネーターとして地域の住民をサポートする役割も果たしていた。
F 氏		直接的な活動はしていないが、勉強のため月 1 回行われるコーディネーター会議に定期的に参加している。

## (2) 活動を通して意識していること、変化したこと

A 代表は、3つの意識を大事にしていた。また、利用者数よりも利用者のエピソードを集めることに集中していた。B氏は、カフェの作業以外にもコーディネーターとして利用者の困ったに対応している。カフェとラボではなくカフェ＝ラボ、ラボ＝カフェとして考えており、泉北財団の事もしながらカフェのサービスを提供している。C氏は、弁護士秘書の仕事をしており、人から否定的な発言を言われることが多く、ネガティブになることが多かった。しかし、コーディネーターを通して、自分のアプローチを見つけて、視点を大きく変えた。なので気持ちに余裕が出来た。D氏は、A代表との出会いが大きかった。A代表のポジティブな姿勢がD氏の気持ちを大きく変えた。表情を変える事が重要と述べた。コーディネーターとして支援をしていると思っていたが、支援されている気持ちになり気持ちが楽になった。そして、周りの知り合いにも泉北ラボのことを話して紹介した。E氏は、人が入れば「こんにちは」、「天気いいですね」といった軽いコミュニケーションを自然的に行うことが大切で、無理に分かる必要はないと述べた。また、フリースクールとして活動していく中で、「安価でサービス提供は限界があるから。収益化出来るようビジネス1本の方がいい」といったアドバイスを受けた。福祉とビジネスの両立性を学び、今は新しい拠点を持ちながら活動に取り組んでいる。F氏は、泉北ラボは関りしろがたくさんある。コーディネーターが常連さんと喋ってる姿を見て、私もああいう風に喋りたいと思ってもらえるように、見られてると思って過ごす。初めて来た人に対して特別扱いしてくれてると思ってもらう。

表 2-6-2 活動での意識と変化

	意識	変化
A 代表	① 泉北世間話をする ② 打ち解ける事で課題に対処する ③ 泉北ラボの顔が毎日変わる。	コーディネーターの役割が少しずつ変化した。また、関係人口が3倍、4倍となり情報の量がものすごく増えた。
B 氏	気づいたら動く。カフェの仕事以外にも施設内の作業をする。こぼれ落ちてそうな困りごとを拾ってる。	学び続ける。子育て相談会のH氏や地域の方と話す機会が増え、自身の知らないコミュニシの事を知れた。
C 氏	話しかけてもらえる雰囲気作りや温かみ、少しおせっかいしてあえて話を聞いたりちょっと突っこむ。	自分のアプローチを見つけて、視点を大きく変えた。気持ちに余裕が出来た。A代表が普段から仕事で上手くいかない事が多く、しゃあないと思えるようになった。
D 氏	人見知りのため、初対面の方にいきなり聞けないので、挨拶から初めて、雑談をする。人に興味を持って聞く事で自身に当てはまる事がある。	A代表の存在が大きかった。考え方、口角を上げることを指摘された。支援してるつもりが支援されていて、元気をもらうことが多くなった。
E 氏	自然体でいられる事。普通であれる事。素直に思ったことを伝える。無理に分かる必要はない。	集まれる場所がある事がすごく大事と気づいた。A代表の経営姿勢を間近で見れたことで、経営視点を持つことが出来た。
F 氏	コーディネーターやボランティアは役割を沢山設ける。居場所と役割はセットで考えている。	

### (3) 泉北ラボの課題と改善点

A 代表は、コーディネーターのやりたい事が点在しておりすぐに卒業してしまう事が課題と挙げ、大学生を巻き込んだ泉北ユースサービスセンターに今後力を入れると述べた。B 氏は、泉北ラボ、カフェそれぞれの課題と改善点を挙げた。C 氏は、チラシの整理やホームページを作成し、泉北ラボという居場所を分かりやすく示したいと述べた。E 氏、F 氏はコミュニティフリッジに対する課題を示した。コミュニティフリッジに関するヒアリング結果は第 4 章に示している。

表 2-6-3 運営における課題と改善点

	課題	改善点
A 代表	関係人口が増え情報量が多くなり、コーディネーターが何かしたいと思う。よって、心に火がつき卒業してコーディネーター不足になっている。	泉北ユースサービスセンターという大学生が中心となってボランティア活動をするプロジェクトを始めた。
B 氏	泉北ラボは A 代表が忙しすぎて人材不足になっている。 カフェは、自身以外の人接客出来るように後継者を探す。	泉北ラボは、大学生を巻き込む。ボランティアセンターを作る。 カフェは、後継者を探すことは急がずに、周りが見れる人物像を描いておく。
C 氏	広報関係の整理が出来ていない。ミシンの使い方を分かりやすくする。泉北ラボの居場所としてのホームページが無い。	陳列が見える化して、チラシを持って帰ろうと思ってもらう。貸出料や施設の使い方をより分かりやすくする。
D 氏	回答なし	回答なし
E 氏	コミュニティフリッジの支援者の意見を聞く必要がある。	寄付者を増やす。
F 氏	コミュニティフリッジの支援者の意見を聞く必要がある。	寄付者を増やす。

### (4) 運営スタッフの意義と課題

ヒアリング結果から対象者の共通点と相違点があった。また、運営におけるこの 3 年間で変化していること、していないことが明らかとなった。

共通点は、B 氏、C 氏、E 氏、F 氏は泉北ラボに関わる前に A 代表と繋がりがあり、A 代表がきっかけで場所に関わっていることが分かった。D 氏は、泉北ラボで A 代表と相談して社会復帰するきっかけを与えてくれたことから、B 氏～F 氏にとって A 代表は重要な存在であり、運営する上で中心にいることが分かった。コーディネーターとしての意識は普通であること、意識しすぎないことが共通の認識であった。

相違点は、泉北ラボで活動する目的がそれぞれ違った。また、設立当初はコーディネーターが 4 人ほどいたのに対して、現在はコーディネーターご不足しており、B 氏、C 氏、学生コーディネーターの I 氏に多くの負担がかかっていることが分かった。ただ関係人口は増え続けており、泉北ユースサポートセンターの立ち上げをきっかけに大学生の活躍が今後期待される。

本章の参考文献

- 1) 引用元：宝楽氏による泉北ラボ資料
- 2) 田中美莉：コミュニティスペースが地域に与える影響について-泉北ニュータウンの泉北ラボを事例に- 2023年武庫川女子大学卒業論文
- 3) 宝楽陸寛：まちな家事室「泉北ラボ」を起点にコロナ渦の「見えない孤立」に挑む、自走型自治モデル報告 2021-2023 2023年



## 第3章

### イベント利用時の空間の使われ方の実態調査

### 3-1. 本章の目的

本章では、レンタルスペースを使用したイベント活動が泉北ラボにとってどのような影響をもたらしているのか。また、泉北ラボの通常時とイベント時でそれぞれどのような空間の使われ方をしているのかを明らかにすることを目的とする。

### 3-2. 調査方法

イベント活動を参与観察し、イベントの種類を分けてそれぞれがどのような役割を果たしているのか調査する。また、泉北ラボを立ち上げたA代表に空間設計やデザインの特徴を、イベント活動をしているG氏に活動のきっかけ、活動を通して地域の利用者とのどのような関係性があるのかヒアリング調査する。

### 3-3. レンタルスペースを活用したイベント

#### (1) イベント概要

泉北ラボではこれまでにレンタルスペースを使用して様々なイベント活動が行われてきた。まちの家事室「泉北ラボ」<sup>3)</sup>の報告書によると、2年間で229団体の活動が行われてきた。泉北ラボでのイベントは誰でも参加することが出来るため、多世代にわたり参加している。



写真 3-3-1. イベント概要



写真 3-3-2. 介護美容ケアビューティー体験会

表 3-3 は、7月から10月のイベントの概要である。イベント活動は合わせて14団体で、それぞれレンタルスペースの家具の配置や参加人数が大きく違った。最も回数が多かったのが、編み物教室と筆ペン教室で月に3回ペースで取り組まれていた。他のイベントは多少のばらつきはあったが、月1回ペースだった。これらのイベントは、家具の配置を変えてやりたいことが出来たり、利用者同士の接点を作るといった普通のコミュニティカフェでは出来ないような役割を果たしている。イベント活動内容は様々であったが、利用者と活動団体の関わり方を参与調査をしていく内に、コミュニケーションの取り方がそれぞれ大きく違っていた。なので、イベントの種類を「地域のための会」「趣味会」「勉強会」に分けて、利用者との関係性を示した。

表 3-3. 7月から10月のイベント概要<sup>1)</sup>

イベントタイプ	イベント名	実施頻度	1回の参加人数	参加費
地域のための会	介護美容ケアビューティー体験会	月2回	9	有料
	きみの森（フリースクール）	月1回	4	有料
	子育て子育て相談会	月2回	不明	無料
	発達に課題のある子の進路選択	単発	24	無料
	南大阪を奏でる会 上沼健二	単発	40	無料
趣味会	編み物教室	月3回	7.5	有料
	筆ペン教室	月3回	5	有料
	ボジャギアートレッスン	月1回	2	有料
	己書 幸座	月1回	3.5	有料
	石けんづくり	月1回	2	有料
	堺 PECS 同好会	月1回	10	有料
勉強会	美容セミナー	月1回	7	有料
	FP3級資格講座	月2回	4	有料
	法律相談会	月1回	13	無料

(2) イベントの利用人数と日程

「地域のための会」の介護美容ケアビューティー体験会は、1回平均約9人いた。他のイベントは単発ではあるが、数十人いるイベントが多かった。「趣味会」は、編み物教室が1回平均約5人、筆ペン教室が約3人であった。大人数ではなく少人数で1つの趣味に対して利用者が黙々と活動していた。「勉強会」は、平均人数はバラバラだった。スクリーンを用いて講師がプレゼンしながらセミナーのような取り組みが見られた。

表 3-3-1. 「地域のための会」のイベント日程<sup>1)</sup>

介護美容ケアビューティー体験会		きみの森		子育て子育て相談会		発達に課題のある子の進路選択		南大阪を奏でる会	
日程	人数	日程	人数	日程	人数	日程	人数	日程	人数
7月12日	10	8月3日	4	8月13日	不明	10月3日	24	7月14日	40
7月24日	10			8月27日	不明				
8月8日	5								
8月21日	10								
9月23日	9								
9月25日	9								
10月21日	11								
10月25日	11								

表 3-3-2. 「趣味会」のイベント日程<sup>1)</sup>

編み物教室		筆ペン教室		ポジャギアート レッスン		己書 幸福		石けんづくり		堺 PECS 同好会	
日程	人数	日程	人数	日程	人数	日程	人数	日程	人数	日程	人数
7月18日	5	7月2日	4	8月6日	2	7月13日	3	10月2日	2	7月10日	20
7月25日	5	7月16日	4	9月4日	2	8月24日	3			8月28日	不明
7月27日	6	7月30日	4	10月2日	2	9月7日	3				
8月24日	4	8月8日	6			10月5日	2				
8月29日	不明	8月22日	3								
9月19日	4	8月27日	不明								
9月26日	10	9月12日	2								
9月28日	5	9月19日	2								
10月27日	10	9月26日	3								
10月19日	5	10月17日	2								
10月24日	6	10月24日	3								

表 3-3-3. 「勉強会」のイベント日程<sup>1)</sup>

美容セミナー		FP3 級資格講座		法律相談会	
日程	人数	日程	人数	日程	人数
7月3日	7	7月9日	4	9月13日	13
8月3日	不明	7月16日	4		
9月2日	5				
10月1日	10				

### 3-4. イベント時の空間の設え

#### (1) 空間設計の特徴

泉北ラボの空間設計は、地域住民が自然に集まりやすく、互いに顔を合わせて交流できる場としての機能を重視している。施設内にはコミュニティフリッジが設置されており、食材を無料で提供することで地域の生活支援を行うと同時に、日常的な訪問のきっかけを作り出している。また、施設内に配置された薪ストーブは、居心地の良い空間を演出し、訪れる人々が暖を取れる場所としても機能する。この薪ストーブは、物理的な暖かさのみならず、心の温もりを提供する象徴的な存在でもあり、地域の人々にとって「安心して落ち着ける場所」としての役割を担っている。

さらに、泉北ラボの家具配置や空間の開放性には、利用者同士が自然と視線を合わせやすい設計が施されている。例えば、テーブルや椅子の配置は自由に組み替えが可能で、利用者の人数や用途に応じて柔軟にレイアウトを変更できる。元々はカフェの前に大テーブルを置く予定だったが、イベント活動で邪魔になりかねないため、縦 90cm 横 60cm の長方形の机を3つ並べた。外の机と椅子は、フランス産でアメリカのブライアントパークで使われてるベンチでワンセット6万円する。また、壁を極力少なくすることで広場のような開放感を生み出し、訪れる人がさまざまなアクティビティに参加しやすい環境を提供している。木の使い方には工夫しており、中の木は利用者同士の視線を切っている。木を動かせることで1人とグループの境界を分けられる。これにより、居心地の良い空間が生まれ、訪れる人々が気軽に会話や交流を楽しめるようになっている。

また、泉北ラボは時計が置いていなかったり、トイレの場所が分かりづらい。A 代表は、「時計がないことで非日常を味わって欲しい、トイレが分かりづらいのは利用者がコーディネーターにトイレの場所を聞く事で会話生まれる。そして、次に話すきっかけになる。」と述べたことから、意図して設計していることがわかる。

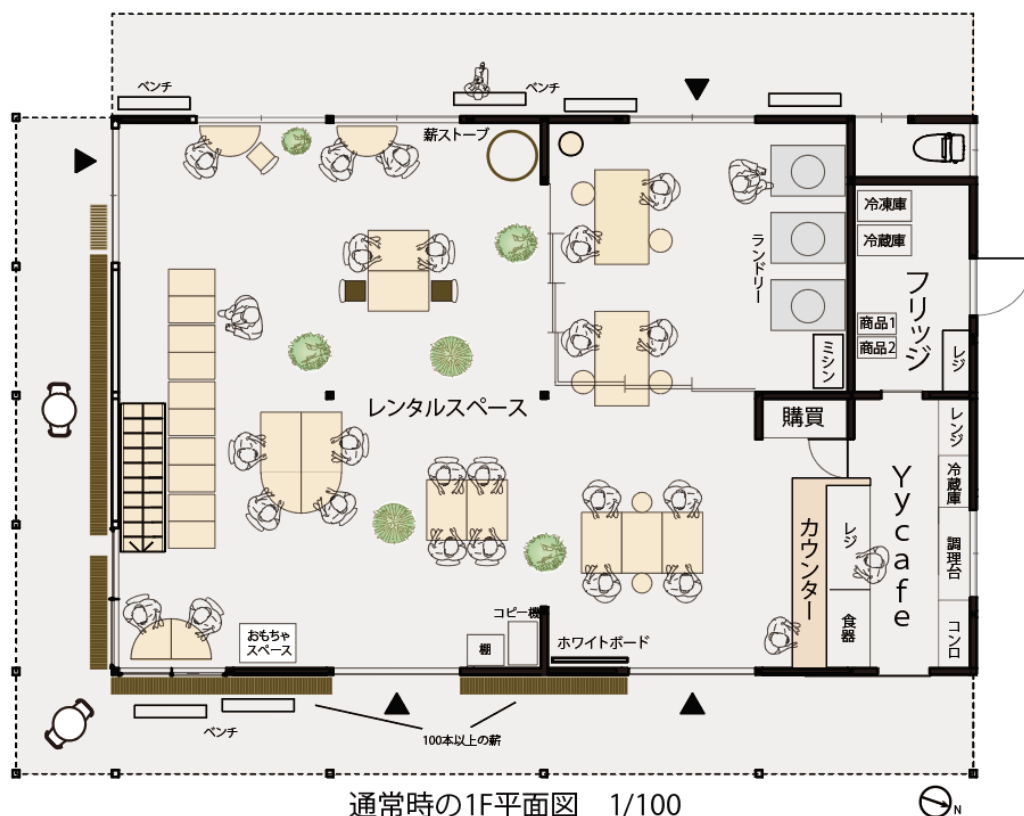


図 3-4-1. 通常時の平面図

## (2) 介護美容ケアビューティー体験会

筆者は2024年10月11日に参加した。介護美容ケアビューティー体験会はネイルケア、ネイルカラー、ハンドトリートメントを体験でき、予約不要、年齢、性別関係なく参加出来る。主催者はG氏。時間は10:30~14:30である。この活動はネイルや美容の体験なので、一見趣味会に分けられる。しかし、介護美容であり、ふつうのネイル体験だけではないため「地域のための会」に分けた。

G氏は、大学時代からアパレルの仕事をしている<sup>2)</sup>。介護美容の活動に興味をもったきっかけは、自身やお客さんが介護が原因でおしゃれができなくなったらと感じた。介護美容でお客さんの可能性を広げると決意し、アパレル業とダブルワークしている。泉北ラボで活動を始めたきっかけは、つながる days で A 代表と出会ったことがきっかけである。ただネイルをするのではなく、体験中に利用者の生活での困りごとや悩みを聞く事を大事にしている。この姿勢が A 代表の目に留まり、2023年5月から泉北ラボで活動している。



現在は活動するだけでなくコーディネーター会議に参加するなど、コーディネーターとしての役割を果たしている。

空間配置は、左上側の家具のみ変わっている。ネイル担当はいつも G 氏とアシスタントの 2 人で、利用者も 2 人まで参加できる。待つときは横の茶色の椅子に 2 人まで座れるようになっていた。利用者は高齢者の夫婦、中年男性、男子大学生、先生が参加されていた。これらの方々は、介護美容ケアビューティー体験会のリピーターであることが分かった。G 氏は、リピーターが増えることはとても良いことではあると述べた一方で、新規の利用者があまり増えていないことが今後の課題であると述べた。

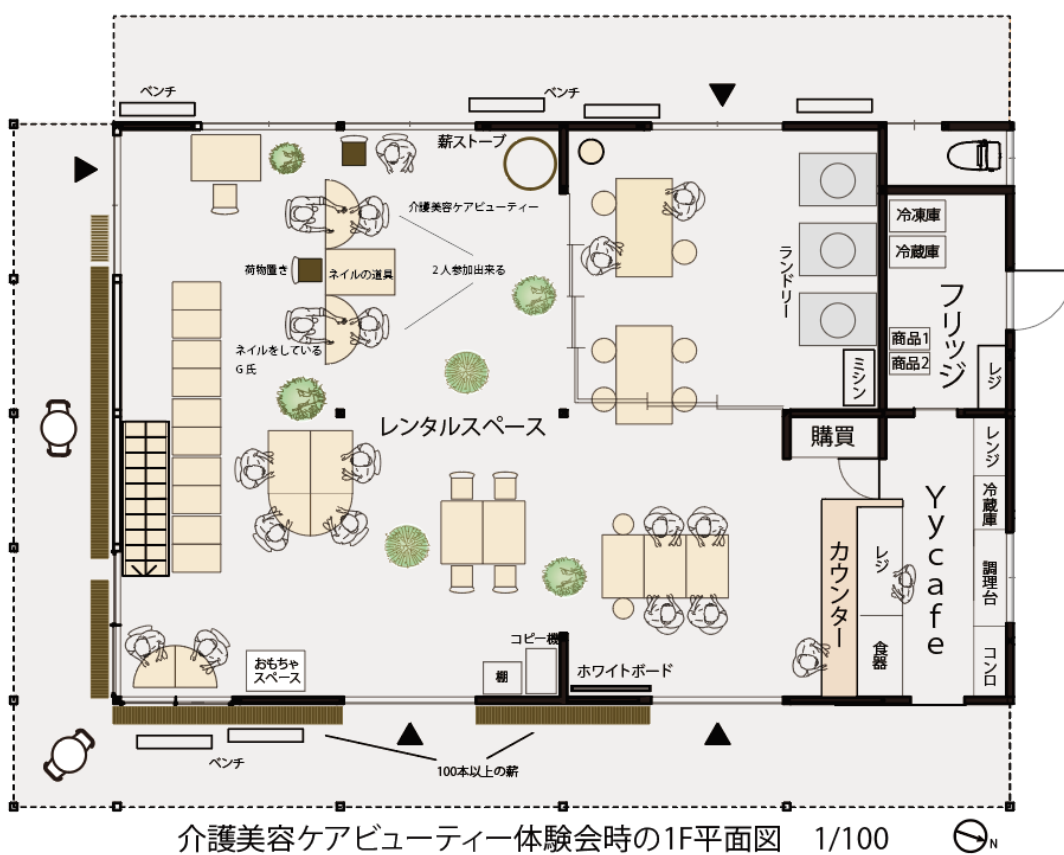


図 3-4-2. 介護美容ケアビューティー体験会時の平面図

### (3) 介護美容ケアビューティー体験会と視察の同時の空間状況

筆者は2024年12月6日に参加した。視察は、A代表が泉北ラボを見学したい、知りたいという方にレンタルスペースを使って説明する活動である。1人3000円90分で予約制である。介護美容ケアビューティー体験会は10:30~14:30で、視察は11:00~12:30であった。

空間配置は、介護美容ケアビューティー体験会の隣で視察が開催されていた。視察はA代表を入れて8人おられた。視察が始まると同時にA代表が介護美容ケアビューティー体験会と視察の空間の間に木を3本置いた。これは、A代表が意図したことである。理由を聞くと、「目線が合うとちょっと緊張すねんけど目線が合わん程度の壁で、物理的に仕切ると境界は出来るねんけど、お互い一緒にここにいるっていう。感じ合いながらこの場所が成立してることってこれすごい大事だと思ってる」と述べた。介護美容ケアビューティー体験会に参加している人が急に視察が始まって、緊張しないように木を置く配慮が見られた。

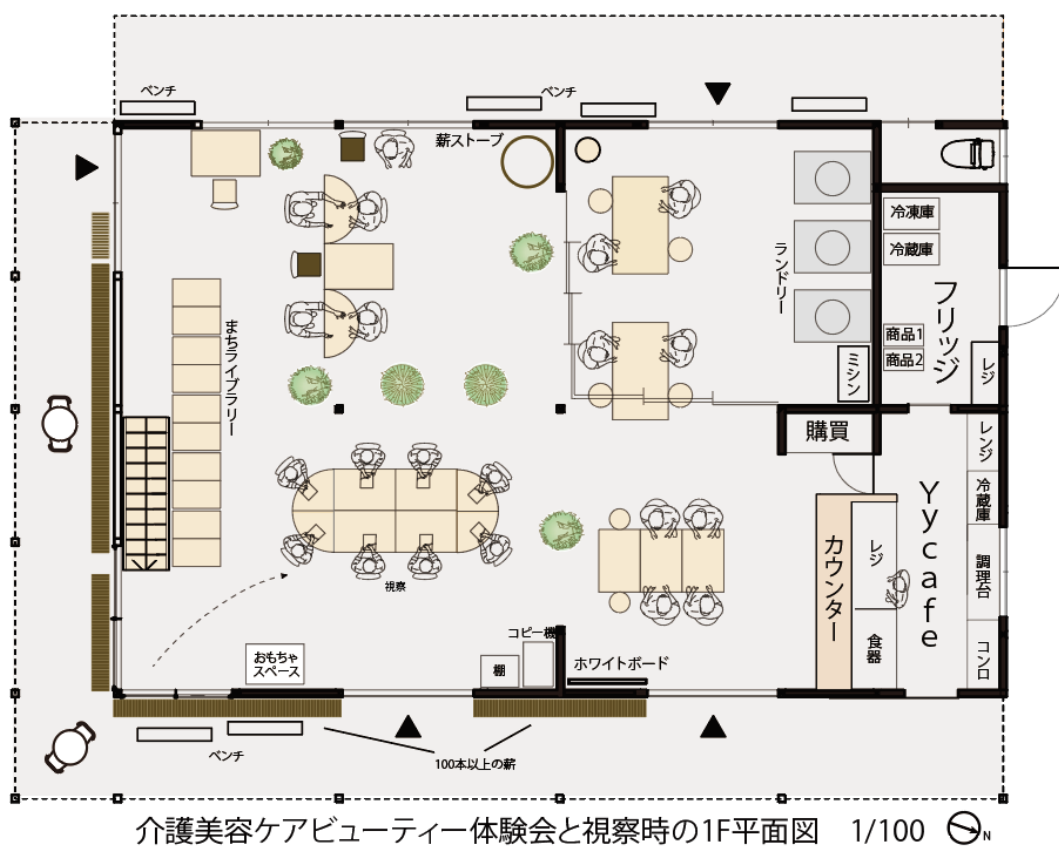


図3-4-3. 介護美容ケアビューティー体験会と視察時の平面図

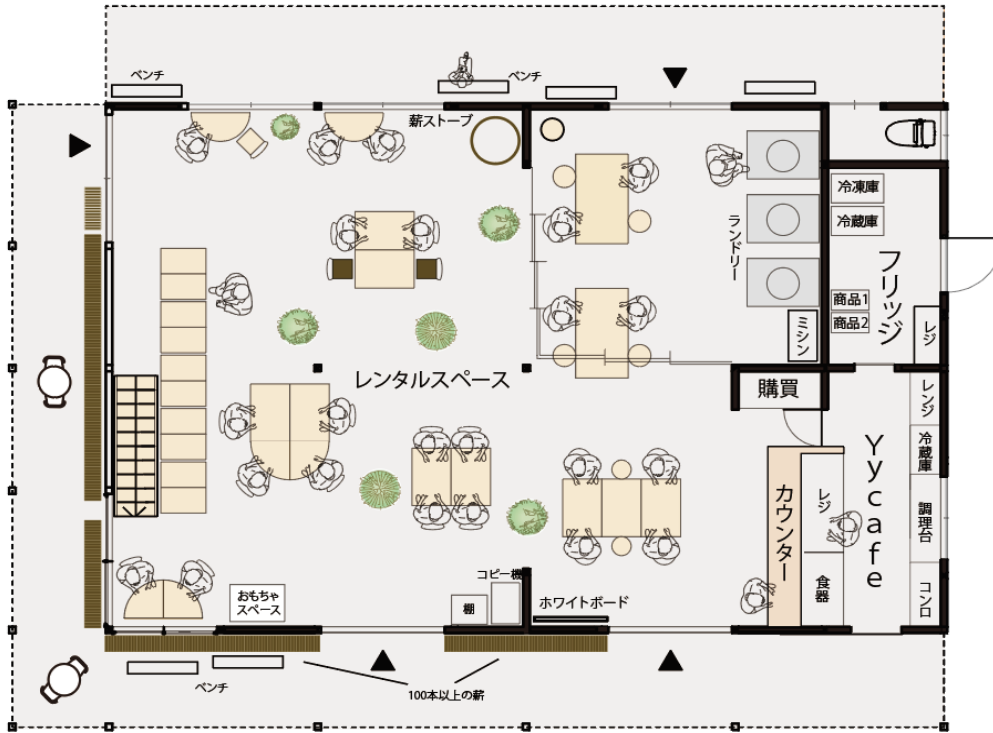


図 3-4-1. 通常時の平面図

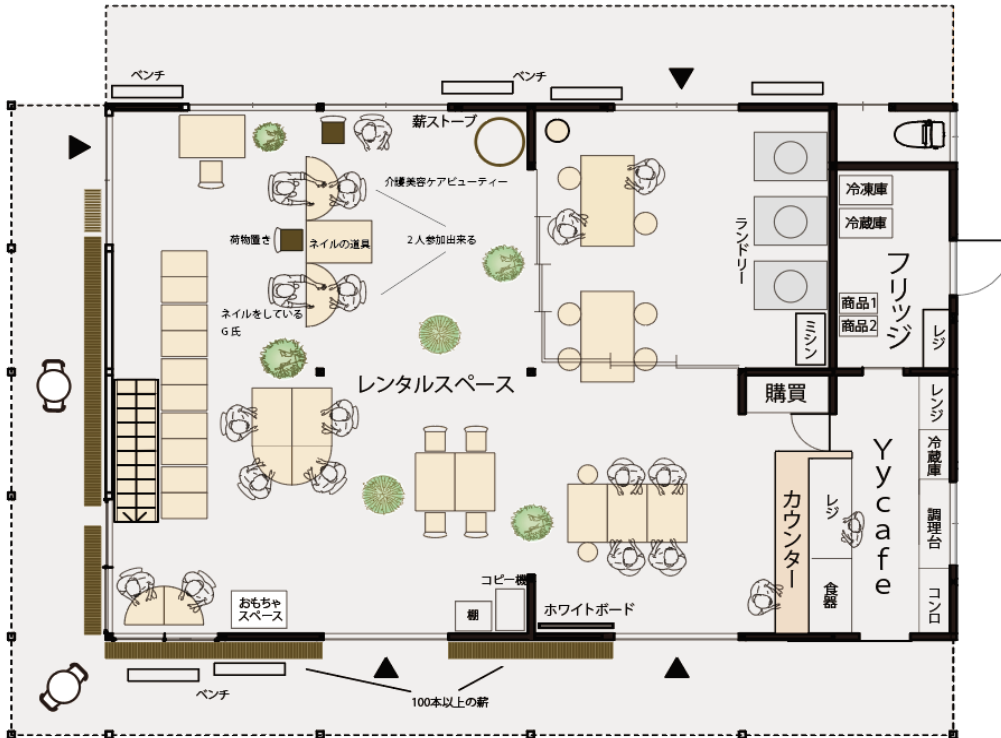


図 3-4-2. 介護美容ケアビューティー体験会時の平面図

## 参考文献一覧

- 1) 2023 年度活動統計資料
- 2) 風祭 耕太の Web マガジン | Kazamatsuri Magazine : 訪問型介護美容シニアビューティーサロンかつまる 代表 勝丸かな : 2024.12.13 閲覧  
<https://kazamatsuri-magazine.com/887>

## 第4章

カフェに併設されたコミュニティフリッジの運用状態

## 4章 カフェに併設されたコミュニティフリッジの運用状態

### 4-1. 本章の目的

本章では、泉北ラボの機能の1つであるコミュニティフリッジの現状と課題を調査する。泉北コミュニティフリッジは単なるフードバンクではなく、居場所と併設して運営している所が大きな特徴であることから、寄付者と支援者が単なる物々交換だけでなく、それ以上の繋がりがあるのではないかと仮説し、明らかにすることを目的とする。

### 4-2. コミュニティフリッジの概要

#### (1) コミュニティフリッジの定義

コミュニティフリッジとは、地域住民が食品を持ち寄り、必要な人が自由に利用できる共有型の冷蔵庫を中心とした支援活動である。この仕組みは主に、食料廃棄を減らし、地域の困窮者や必要としている人々に無料で食料品・日用品を提供することを目的としている。多くの場合、食品の寄付やボランティア活動を通じて支えられている。食品の安全性や管理については厳しいガイドラインが設けられることが多く、地域の連帯感や持続可能性を促進する重要な取り組みの一つである。利用において、利用者は登録制で24時間受け取り可能、出入りは電子ロックである。

2025年1月現在では、全国の12カ所で活動が続いている。全国で最初に活動がスタートしたのは、北長瀬コミュニティフリッジである。場所は岡山県岡山市北区北長瀬表町2丁目「BRANCH 岡山北長瀬」ショッピングモールの敷地内にある。この場所をきっかけに全国展開している。その多くは駐車場の裏側や倉庫に設置されており、人が交流しない場所に置かれている。

#### (2) 泉北コミュニティフリッジ

泉北ラボのコミュニティフリッジは、従来のフードバンクとは異なり、単なる物資提供の場にとどまらず、地域住民の交流やつながりを促進する「居場所」としての役割を担う点の特徴である。フリッジを中心にカフェ、レンタルスペース、まちライブラリーといった多様な機能を備えることで、利用者が気軽に時間を過ごせるよう配慮されている。また、「居場所」としての機能を重視することで、ただ物資を受け取るだけの場ではなく、地域住民同士が関わり合い、お互い様の精神が芽生える環境を提供している。このような居場所型のコミュニティフリッジは、単なる食品支援を超えた意義を持ち、地域社会における新しい公共の形を模索するモデルとなっている。

泉北コミュニティフリッジの利用資格は、①子育て中の世帯、②児童扶養手当もしくは就学援助を受給されている。2つの資格を両方満たす方が対象である。寄付品は食料品と日用品で成り立っている。食料品は未開封、消費期限が長いものは可能で、家庭で作られた料理やご飯（炊飯済み）は受け取り不可能となっている。日用品は石けんや洗剤が対象となる。寄付品は泉北ラボの中に直接持ってきてもらい、コーディネーターが対応する。



また、コミュニティフリッジのホームページにフリッジ用の寄付を募集しており、お金で寄付することが出来る。

### (3) 寄付者について

寄付者は、40-60代の女性が多い。年配の方々はお金に多少の余裕がある。段ボールに大量の寄付品を持ってこられる方が多い。中身の商品は、缶詰、インスタントのカレー3種類×3、スナック菓子など様々である。お米は寄付金でコーディネーターが買う。近くの業務スーパーに買い出しに行く。10kgのお米を買い、分担する。1kgずつジップロックに入れる。利用者が2、3日に1回持って帰れるように、フリッジの使用頻度によって調節している。食材の分別は、学生コーディネーターの氏が任されている。1家庭につき、1品2品3品と分けている。

### (4) 支援者について

支援者は、現在約200人。ヒアリング調査によると、寄付者より支援者が多いので、寄付品は現状足りない。過去のコーディネーターの氏は、ボランティアしながらもフリッジを利用していただいていた。自身の家庭が苦しいときに泉北ラボを訪れ代表と出会った。そこで、D氏がフリッジの対象者であったことから、支援されるようになった。

## 4-3. 調査方法

これまでコミュニティフリッジに関わってきた方々に、コミュニティフリッジに対する関わりや意識、実際に行った活動内容をヒアリング調査する。調査対象者は、2章のヒアリング調査と同様である。

表2-6. ヒアリング対象者

	活動	活動期間	ヒアリングした日
A 代表	泉北ラボ代表	設立前~現在	2024年10月25日
B 氏	Yy カフェ店長	設立前~現在	2024年12月6日
C 氏	財団乗組員	2022年10月~現在	2024年10月24日
D 氏	元コーディネーター	2022年1月~10月	2024年10月28日
E 氏	元コーディネーター	2022年1月~2022年3月	2024年10月30日
F 氏	泉北ラボ外のコーディネーター (泉北 base 店長)		2024年10月30日

#### 4-4. ヒアリング結果

ヒアリング調査から、コミュニティフリッジに対する考え方や、コーディネーター視点からの運営上の課題、改善案を抽出し、今後の新たな取り組みや活動を展望する。また、居場所と併設して運営していることから、寄付者と支援者が単なるあげるもらうの関係性だけでなく、支援される側から支援する側になっているのではないかと仮説を持って取り組んだ。A代表~F氏は泉北ラボに滞在していた期間や活動内容がそれぞれ違うため、その人に合った質問をしている。

##### (1) 泉北コミュニティフリッジの設立背景

A代表は泉北ラボの設立に当たって、コミュニティフリッジを併設した理由は、普通の顔をしてのに、地域でしんどい思いをして暮らしてる子育て世帯のためだけを考える場所を作りたい思いがあった。日常の普段の生活の延長線上に支援の場所があることが、どのような変化を生むのか観察もしくは実験したかった。フードバンクのようなコミュニティフリッジは出会わないけど資源を感じることが出来る。1番ハードル低い事が出会わないけど感じる事、出会って話す、コーディネーターと交わっていくといろんな困り事がだんだん自分の言葉になって、場合によっては人の力を借りることもある。このように子育て世代は誰かの力を借りて支援を受ける。このサイクルに入るとニーズに合った支援が充実して、場所は住民の信頼が高まって当事者同士で口コミで広がっていい街ができるのではと仮説した。それがA代表がコミュニティフリッジを設立した経緯である。

##### (2) 泉北コミュニティフリッジの利用度

コミュニティフリッジの利用回数<sup>1)</sup>は2022年が1232回に比べて2023年は1140回と減っている。<sup>1)</sup>一方で寄付額は2022年は128万3063円に比べて2023年は174万2382円と増えていた。

##### (3) 泉北コミュニティフリッジに対する活動内容

表4-4-1より、A代表は、現在は多忙のため泉北ラボにいない時間が多いため、コミュニティフリッジに対する活動をする事は少ないが、設立当初は泉北ラボの利用者にコミュニティフリッジの存在を知ってもらうために、エプロンを着けて活動していた。B氏は、カフェとコミュニティフリッジが隣であることから、利用者の声が聞こえやすい。その際は声をかけずにいるが、困っている様子が確認できれば声をかけている。C氏は、管理だけでなく相談することを重要視しており、コミュニティフリッジの面接時には相談できる人という印象づけることを心がけている。D氏、E氏はコミュニティフリッジの管理や宣伝活動に取り組んでいた。

表 4-4-1. コミュニティフリッジの活動内容

	取り組み
A 代表	設立当初はコーディネーターとして、利用者に声をかけていたが、すぐに忙しくなり、現在は対応が難しい。
B 氏	コーディネーターが忙しい状況、また不在時に寄付者から寄付品を受け取り管理している。
C 氏	寄付者から寄付品を受け取り管理している。深刻な方に対して注力して見ており、相談しながら行政や支援できる場所に繋げている。
D 氏	寄付者から寄付品を受け取り管理していた。また、フリッジの利用者でもあった。
E 氏	コミュニティフリッジを宣伝する係だった。フリースクール活動をしていたため、フリッジに対する相談や登録を勧めていた。
F 氏	

(4) 泉北コミュニティフリッジに対する考え

表 4-4-2 より、A 代表は、コミュニティフリッジ単体で捉えるのではなく、花びらのような支援の 1 つである。そのわかりやすい場所がコミュニティフリッジではないかと述べた。利用者である D 氏はフリッジを利用することで、自身が助けられている状況、すなわち支援されている側にいてると実感した。一方で C 氏、E 氏はフリッジの利用者と直接交わることが多い経験から、機能があっても実際は本当に苦しい生活をしている方が簡単にフリッジを利用できるほど上手くはっていないと述べた。F 氏は、フリッジの寄付品が増えれば困難な状況の方のサポートは潤うかもしれない。しかし、それは根本の解決にはなっておらず、なぜその方がそのような困難な状況に陥っているのか真剣に議論すべきではないかと述べた。

表 4-4-2. コミュニティフリッジに対する考えや事実

	現状と事実
A 代表	提供しているサービスの花びらの 1 つであって欲しい。小規模でありながら多機能な面を果たしている。
B 氏	利用者をこれまでに 1 番近くで見ている。朝方と夕方にサラリーマンらしい方がよく訪れる。
C 氏	フリッジの登録を勧める一方で、利用資格に当てはまらない方に対して行政への繋げ方や支援の相談が難しい。
D 氏	フリッジの利用をしており、大きな感謝をしている。また、支援するつもりが支援されている側でもあった。
E 氏	24 時間空いてる事はいいことである。一方で本当に困っている貧困世帯は簡単に取りに来れるほど余裕はない。
F 氏	受益者を元気づけられると、寄付側に回せられる。なので、受益者が減れば、社会がより生き生きする。

### (5) コミュニティフリッジの課題や改善点

表4-4-3より、A代表、C氏は、これまでコミュニティフリッジの寄付者が個人メインであったことから、これからは法人に力を入れる活動を行う。地域の家庭菜園をしている方と連携し、野菜を置きたいと述べた。また、フリッジの利用者にアンケートの実施、電話をする機会を設け、どのような寄付品を求めているのか声を聞く必要があるとも述べた。D氏は、頼るのが当たり前の社会で、逆に困ったときは少し助けてもらい、その後何か地域に対して出来ることがあればそのときは頼られる仕組みが今後必要だと述べた。E氏、F氏は、現時点での改善点は難しいと答えたが、支援者よりも寄付者が増えるべきだと述べた。またF氏は、施す側が寄付したことでコーディネーターは気持ちが満たされて当たり前と思っている。一方で支援者はそれ以上の感謝があり、ここでのギャップが生じているのではないかと考えている。コーディネーターは日頃から本当に感謝を込めて接するべきであると述べた。

表4-4-3. コミュニティフリッジに対する課題

	課題・改善点
A代表	泉ヶ丘ひろば専門店街で開催されるつながる days に参加したり、寄付を増やすためのプランを立てている。
B氏	回答なし
C氏	広報活動。冷凍庫や冷蔵庫の下の段を上手く活用できていない。また、利用者との接点がないから、アンケートをとる。
D氏	支援を受ける側は抵抗感があることから、しんどい時は頼ることも大切である。より支え合いの仕組みが出来れば良い。
E氏	絶対必要な場所で、活気的ではあるが、スマホロックが難しい方もおられるから、簡単には上手くいかない。地域に上手く広まっていくと良い。
F氏	施す側の目線だけではフリッジの良さや悪さが分からないから、本当のフリッジの良さは施される側の意見である。そのために、まずは寄付者に対して感謝の気持ちの伝え方を考える。

### 参考文献一覧

- 1) 2023年度活動統計資料

## 第 5 章

### 結論

## 5章 結論

### 5-1. 各章のまとめ

#### (1) 泉北ラボの運営実態の調査

泉北ラボは、ニュータウンにおける地域コミュニティの活性化を目指し、「花びらのように広がる支援」を理念に設立された施設であった。住民が気軽に訪れ、日常的に支え合う場となり、孤立や困難に直面する際に頼りになる場所を提供することを目的としていた。泉北ラボの特徴は、利用者同士の自然な交流を促し、支援が必要な住民を柔軟に受け入れる点にある。「花びらのように広がる支援」という表現は、多様なサポートが同心円状に広がり、必要なときに誰もがアクセスできることを表している。この理念は物理的な支援にとどまらず、社会的つながりの提供や住民の自己効力感の向上を意図しており、地域コミュニティの持続的発展に向けた設立背景を反映しているといえる。

また、泉北ラボにおけるコーディネーターの役割は、利用者のニーズに柔軟に応え、施設を利用する人々の安心感と居心地の良さをサポートすることにある。コーディネーターは「普通であること」と「生活者感覚」を持つことが求められている。ここでいう「普通さ」とは、特定の専門知識や資格がなくても、日常生活において利用者と同じ視点で物事を理解し、共感できるという意味である。このような「普通さ」は、利用者がリラックスして話しかけやすい雰囲気を作り出し、信頼関係の土台となる。また、コーディネーターには、地域住民の一員としての「生活者感覚」が必要である。これにより、日常的な生活の中で感じる小さな困りごとや、気になることに対して自然に関心に向け、適切にサポートできている。コーディネーターの具体的な活動内容としては、利用者との世間話やちょっとしたつぶやきを丁寧に拾い、そこから利用者の抱える課題やニーズを探ることが含まれる。例えば、利用者がどのような状況や思いを抱えているかに耳を傾け、必要な場合には他の施設やサービスへつなげる役割を果たしている。また、利用者が訪れやすく、安心できる空間を維持するために、日常的な清掃や設備の整備、物理的な環境の調整も行っている。泉北ラボでは、コーディネーターがその場の状況に応じた柔軟な対応を重視し、利用者が必要とする支援が自然と提供されるよう努めている。

#### (2) イベント利用時の空間の使われ方の実態調査

泉北ラボではレンタルスペースを利用してイベント活動をする団体が多く存在する。その中でも介護美容ケアビューティー体験会は、ただネイル活動するだけでなく、コーディネーターの役割を果たしている。利用者との信頼関係を基盤に進められ、親身に寄り添うことで「ここなら話をしても大丈夫」という安心感が生まれている。この信頼関係が、泉北ラボへの訪問者の増加と地域内の新たなつながりの形成に寄与している。さらに、信頼関係をもとにしたソーシャルキャピタルの増加は、泉北ラボの活動基盤を強化し、地域に



おける連帯感を醸成している。このような取り組みによって泉北ラボは地域に根付いた持続的なコミュニティの形成に大きく貢献している。

また、「居場所」としての機能も重視しており、地域住民が気軽に訪れ、安心して過ごせる空間を提供している。この施設では、自由な出入りや多目的利用が可能であり、利用者は特定の目的に縛られることなく、自らのペースで過ごすことができる。このような自由度の高い空間設計により、利用者は「ただそこにいるだけで心地よい」という心理的な効果を感じることができ、泉北ラボを第二の「居場所」として認識するようになっている。泉北ラボの居心地の良さは、空間設計や家具の配置にも表れている。例えば、薪ストーブやコミュニティフリッジ、利用者が自由に座れるテーブルの配置など、利用者がリラックスして過ごせる工夫が随所に施されている。また、明るい自然光が差し込む空間や、視界を遮らないレイアウトにより、開放感と適度なプライバシーが確保されている。さらに、利用者が椅子や机を自由に動かしてレイアウトを変えられることも、この場所が「自分の居場所である」という意識を持つ要因のひとつとなっている。

泉北ラボの「居場所としての機能」は、単なる施設利用以上の意味を持ち、利用者にとって日常生活の一部として受け入れられている。このような環境が、利用者の精神的な安定や心理的な充実感に寄与し、地域コミュニティの持続的な発展を支える役割を果たしている。

### (3) カフェに併設されたコミュニティフリッジの運用状態

コミュニティフリッジは、地域住民が食料を共有する冷蔵庫であり、食料支援や食品ロス削減を目的として設置されている。この取り組みは、食料不安を抱える住民への支援だけでなく、地域内の交流を促進し、社会的孤立の解消にも寄与している。また、住民が自主的に運営・管理することで、地域の自走型自治の実現にもつながる可能性がある。

泉北コミュニティフリッジは、居場所と併設して運営していることから、支援者と寄付者が繋がっているのではないかと仮説したが、実際はあまり繋がっていないことが分かった。また、寄付品の不足がずっと続いており、寄付者より支援者のほうが増えている傾向であることが分かった。

これからの改善点として、支援者を助けて寄付側に持っていくことが重要である。寄付者が安定していても支援者が増えていくといつまでたっても変わらない。11月～1月のコーディネーター会議は、コミュニティフリッジに対する議論があった。コミュニティフリッジの支援者を管理係、寄付者をコーディネーターにする案があった。課題が多いコミュニティフリッジではあるが、今後は支援者の意見や欲しい寄付品を認識するところから始める事が大事であることが分かった。

## 5-2. 結論

本研究では、ニュータウンにおける私設公民館としての泉北ラボの運営実態に焦点を当て、その特異な運営方針や地域への影響について考察した。泉北ラボは、「花びらのように広がる支援」という理念のもと、地域住民が主体的に関わり、コミュニティの連帯感を育む場として機能している。コーディネーターが果たす「リンクワーカー」としての役割は、泉北ラボの要として、住民が日常的に集うことで自然発生的な信頼関係が生まれ、互助のネットワークが広がることに寄与している。また、地域住民の多様なニーズに応じて、コミュニティフリッジや薪ストーブなどの設備が提供され、物的・人的交流が促進される点が特徴的である。

さらに、泉北ラボにおける空間設計や開放的な施設構成は、利用者同士が気軽に接触できる仕組みとして重要であることが確認された。多様な利用者層が集う泉北ラボにおいて、施設の運営方針やコーディネーターの「普通さ」といった要素が、利用者にとって居心地の良い空間を生み出し、信頼を基盤としたソーシャルキャピタルが形成されている。泉北ラボの「普通さ」は、利用者に対してこんにちは、天気いいですねといった日常会話を自然体で取り組んでいる。このように、泉北ラボは、従来の公民館の枠を超え、地域の課題に対応しながらコミュニティを再構築する可能性を持った私設公民館のモデルとして、新しい自治の在り方を提案しているといえる。

泉北ラボが自走型自治のモデルとして発展していくためには、まず運営の安定化に向けた人材の確保と資金調達の課題が重要である。特にコーディネーターとして関わる人材の不足は、泉北ラボの活動の持続性に影響を与えるため、地域に根ざしながらも外部の大学生や企業サポーターを取り込むことで、人的資源の安定化が必要である。さらに、今後の展望として、泉北ラボが地域資源としての役割を強化することで、他地域のニュータウンや団地のモデルケースとなる可能性がある。

泉北ラボの運営が示す「地域との対話を通じた持続的な自治の在り方」は、今後のコミュニティ形成や地域の活性化において重要な示唆を与えるものであり、他地域においても応用可能な自走型自治の枠組みとして注目されるだろう。

## 参考文献一覧

- 1) 張 海燕, 柏原 士郎, 吉村 英祐, 横田 隆司, 飯田 匡:新千里東町の「ひがしまち街角広場」の利用実態と利用者意識について: 高齢社会に対応したコミュニティ施設の整備手法に関する研究 日本建築学会計画系論文集、2005 年 70 巻 589 号 p. 25-32
- 2) 余 錦芳, 松本 真澄, 上野 淳:多摩ニュータウン高齢者支援スペース・福祉亭利用者の地域生活様態とその地域社会における意義 日本建築学会計画系論文集、2012 年 77 巻 679 号 p. 2025-2034

- 3) 田中 康裕, 鈴木 毅, 松原 茂樹, 奥 俊信, 木多 道宏: 日々の実践としての場所のしつらえに関する考察: 「ひがしまち街角広場」を対象として 日本建築学会計画系論文集、2007 年 72 巻 620 号 p.103-110
- 4) 田中 康裕, 鈴木 毅, 松原 茂樹, 奥 俊信, 木多 道宏: コミュニティ・カフェにおける「開かれ」に関する考察: 主(あるじ)の発言の分析を通して 2007 年 72 巻 614 号 p.113-120
- 5) 引用元: 宝楽氏による泉北ラボ資料
- 6) 田中美莉: コミュニティスペースが地域に与える影響について-泉北ニュータウンの泉北ラボを事例に- 2023 年武庫川女子大学卒業論文
- 7) 宝楽陸寛: まちの家事室「泉北ラボ」を起点にコロナ渦の「見えない孤立」に挑む 自走型自治モデル報告 2021-2023 2023 年
- 8) 引用元: 2023 年度事業活動統計資料
- 9) 風祭 耕太の Web マガジン | Kazamatsuri Magazine: 訪問型介護美容シニアビューティーサロンかつまる 代表 勝丸かな: 2024.12.13 閲覧  
<https://kazamatsuri-magazine.com/887>

## 謝辞

本論文に際し、研究全般にわたり、当初より現在に至るまでご指導、ご鞭撻を頂きました近畿大学助教授 浦井亮太郎先生に深く感謝いたします。先生から学んだこと、また浦井ゼミでの経験は、私の大学生活において大きな変化を得て、価値観を変えたと感じています。多くの指導や知識を与えていただいたことに心からお礼を申し上げます。

また、泉北ラボにおいて、調査にご協力いただいた公益財団法人泉北まちと暮らしを考える財団代表の宝楽陸寛氏、Yy カフェの山中勇也氏、乗組員の穂積亜由氏には本当に感謝いたします。また、ヒアリング調査の協力を頂いた野本美貴氏、川辺響子氏、鈴木有美氏、高田美奈子氏、お忙しい中時間を設けていただき誠にありがとうございました。深く感謝を申し上げます。

2025 年 1 月 近畿大学 建築計画研究室 大石悠斗

## 資料編

資料1 A代表へのヒアリング（文字起こし）

資料2 B氏へのヒアリング（文字起こし）

資料3 C氏へのヒアリング（文字起こし）

資料1 A代表ヒアリング（文字起こし）

2024年10月24日（木）

筆者： よろしくお願ひします。まず、泉北ラボって孤独孤立だったり子育て世代のための施設をテーマにして立てられると思うんですけど何でコミュニティブリッジをつけたんですか？大きなきっかけとあってありますか。

A代表： 自分の中では提供してるサービスは、いっぱいあってさっき話したみたいに花びらみたいにこういう支援を作りたくて、まず、今みんな子育てしてる人たちって基本的にモヤモヤして生きてるんすよ。基本自分の自己責任、自己決定、あるべき姿を求められてるから。そのために俺らは関わる入口をいくつか用意しますと、1つ目は町の会議室での接点、2つ目がおかずボックスっていう配達型の子供食堂でやってる。それ以外にフードバンクというコミュニティフリッジを提供やってますと。そこを通じていろんな人に出会ったり話したりコーディネーターと話すが、フードバンクのようなコミュニティフリッジは出会ってないけど資源を感じるやん、物があるかないかで。一番ハードル低いのが出会わないけど感じるこゝと、出会って話す、コーディネーターと交わっていくと、いろんな困り事がだんだん自分の言葉になって、場合によっては人の力を借りるこゝともある。こうやって子育て世代は誰かの力を借りて支援が受けれてて、このサイクルに入るとニーズに合った支援が充実して、場所は住民の信頼が高まって当事者同士で口コミで広がっていい街ができるんじゃないかなってのが俺の仮説なんよ。そん中で一番実験したかったのは、普通の顔してるのに、地域で少ししんどい思いをして暮らしてる子育て世帯のためだけを考へてる場所を併設したかった。日常の普段の生活の延長線上に支援の場所があるってどういふ変化を生むんかなってというのが観察したくてそれでコミュニティフリッジを併設した。フリッジの光熱費は電気代とエアコン代ぐらいやからな。

筆者： ラボって実験ってこゝとですよ。

A代表： 泉北ラボのラボは実験だよ。それはずっと意識してる。ずっとラボってんだけども笑。俺の中ではコミュニティフリッジと薪ストーブはもう同じなんよ、意味が。ランドリーも一緒、山中くんも一緒。机の仕組みも本棚も。全部一緒。あくまでその一つの機能としてフリッジがある。フリッジだけ見ると確かに福祉的な要素を持ったカフェなんだけど、考へてる側としては、そんなふうには考へてないんよ。花びらの一つってこゝとかな。最近言い出してる言葉は小規模



だけど多機能。それをわかりやすくアウトプットしてる場所がコミュニティフリッジなんだと思う。

筆者： フリッジを利用する人もラボに入って、カフェ飲むとかってというのは全然ありますよね？

A 代表： 全然あるよ。その人達に余裕があったらもしくはゆっくりしたいなと思えて貰えたらいい。そう考えたら、その人たちに心のゆとりがあるときにコーディネーターが喋ってくれる事によって、いつもありがとうございますって気持ちが直接伝えられたりとか、この場所への関わるきっかけを持ってくれたりする。例えば無人販売所みたいな、あそこだけポツンと置いてると、その人の生活延長線上にはあるけどその人の暮らしやその人にとって人とのコミュニケーションって変化せーへんやん。だから人が多目的に集合している場所と、ああいう無機質なものを合わせてるっていう感覚。

資本主義経済っていうのは今の世の中では完全な正解やん。就職しようってなるやん。その中で GDP が世の中の成果指標でその成果指標は労働力と資本力で、労働力は働く量とその生産性、資本力っていうのは投下資本されたお金と資本を効率的にどう生かしてるかってやねん。この二つの2軸で世の中を計れるようになってんねん。これは正解やねん。長く資本主義経済が出来てるから。だけど、資本主義経済的な社会だけで何かうまく正解が出えへんぞって言う中で、一つの価値観としては国民総幸福度っていう GNH っていうのを1回置いて見てるわけよ。世の中的にはな。ただこの比較表は自分で作ったんやけど、ところが生活していく上で、何かお金じゃないけど人の繋がりがって資本やなって思った。それを表明したいなと思ったときに、広場のイベントもするし、茶山台団地の取り組み等色んなことをするし、自治会長もするし、コミュニティ財団も作るって、いっぱい実験してるんだけど、そん中で GDP に対比する世の中の資本って何かなって思ったら、ソーシャルキャピタルって言われてる社会関係性資本やと俺は思ってる。社会関係性資本っていうのは、要約する人との繋がりのこと。人との繋がりの総量が、その人の暮らしの豊かさを決めるっていう。めっちゃ分厚い本で孤独なボーリングっていうアメリカの人が書いた論文があるねんけど、この本にソーシャルキャピタルの話に出てくる。それも一緒。だから繋がりが豊かさであると思ってるね。だから、花びらのように広げたい。

筆者： コミュニティフリッジって北長瀬の方が作られたと思うんですけど、どこで知ったんですか？

A 代表： 友達。やってるひとが友達やって、いいなと思ったからコミュニティフリッジをつけた。スマホで開けるシステムあるやん。キントーンっていうシステムを使ってるんやけど、開け閉めについて、資金これくらいで考えてんねんけど、どういうシステムがいいとか相談して、こんなふうにやったらどうですかっていう簡単なイメージみたいなのを一緒に作らしてもらった。キントーンの仕組みの中で、これどうみたいな案を出して、システムを変えれる専門家が知り合いの友達にいたから、紹介してもらった。北永瀬が始めるときにキントーンの仕組みを一緒に作った。日本全国に知り合い多いんですよ笑。

筆者： 泉北ラボの利用者にフリッジの存在を知ってもらうために、代表自身が利用者に声をかけることって今でもありますか。

A 代表： 今はない。けど当初はやってる。エプロンも付けてたで笑。コーディネーターとして。テーブルよ一座ってたで笑。いうてる間に出来なくなったけどな笑。利用者に声かけてこういうのがありますっていうのをそう伝えてた。ずっと山中くんに、さあいつからここ座れなくなるかなとか喋ってた笑、けどすぐ座られへんくなったな笑。

筆者： 当初って、コーディネーターの方って誰がいたんですか？

A 代表： 野本さん。最初は野本さんで、乗組員だけど、川辺さんも最初コーディネーターでスタートした。あと大内さんって方もいた。いまの繋がる days のコーディネーターが村上さんで、前のコーディネーターが大内さんだった。繋がる days のコーディネーターをしてる中で、僕に会いに来るついでにもうここで座っとけよみたいな感じで泉北ラボにコーディネーターをした。

筆者： 今泉北ラボの中での話を聞いたんですけど、例えば外の軒下とかでお話したこととかもあるんですか？

A 代表： 今は全くできてないんだけど、最初の頃は、まず中掃除して、トイレ掃除するやん。んでこのまま周りをずっと掃き掃除してて、さらに外の落ち葉をずっと

拾っててん。ずっとやってて、暑い日も寒い日も。1年か1年半ぐらいやってた。そっから鬼忙しくなってできへんくなってる笑。

筆者： 掃除してる中でラボの利用者と会いますか？

A 代表： めっちゃ会う。掃除してるときもおはようございますってめっちゃ挨拶する。通ってる人は宝楽の事ほとんどが大学生の先生と思ってる。ネクタイしながらやってたからさ。あるおじいさんは、今日もおはようございますって声掛け合う。何してんのって言われた時に、フリッジの事を、説明したりするな。コミュニティフリッジを広げるために、普通に信頼性を得るみたいなことをずっとやってきてる。みんな喋りたがってるかな。接触回数がやっぱりここでも大事。毎日挨拶したら勝手に向こうから喋ってくる。いつも8時45分に通過するお姉さんがいて、すごいタイプで、雰囲気があるけど、あんま喋ってくれへん笑。自分の中で抽象化する。何々さんと名前付けたりする。いつも無愛想なサングラスかけたおっさんとかもいっぱいおるねんねんけど、そういうのを意識しながら喋る。

筆者： 泉北ラボの前を朝いつも通られるんですか？

A 代表： ラボの前を通る人と落ち葉の前を通る人がいる。大体みんな生活スタイルやから大体同じ時間に通ってる。

筆者： その方たちの中で挨拶してラボを利用するようになった方とかいますか？

A 代表： いっぱいおる。ここ何してるとか聞かれて入ってくれる。最初は人おらんときとかは、コーディネーターが入り口まで出てることもよくあって、こんにちは。ここはなんなんですか？この場所は～です。良かったらどうぞみたいな事をしてた。建物全体でこの場所が1番目立つやん。だからその人たちがどう関心を持ってもらえるかっていうふうに考えて、その入口の看板の位置とか角度とかもめっちゃ口だしてるねん。

うちの公益財団法人泉北とまちを暮らしを考える財団の理事に増田昇先生っていうランドスケープのプロがいる、日本造園学科の会長とかしてる。その人にも建物が建つ前にここに咲く桜の位置とか、全部決めてやってもらってん。駐車場の位置はその決まったこと以外の後付けかな。で、全部見てもらった上で、

そののでかい木とかの高さ揃えることを全部含めて、全体でここに座ってることが楽しいみたいな案を作ってるねん。

フリッジの見える角度も意識してる。前と後ろから見えないように意識してる。やっぱりこの席に座った時に、向こうの歩いている人と目が合うっていうのは結構重要と思っててる。開口部も前は学校の門もやってん。それでめっちゃ塀が高くなって、2m ぐらいあって、全然こっち見えへんかってん。だから頼むから潰してくれとめっちゃ言った。お金があるない関係ないし、売り上げ下がったらどうしてくれんねんとか学校に言ったら開放も広げてくれた。めちゃうちゃやな笑。で、俺は絶対にここを門じゃなくて開けばなしにしたら、ここ抜ける人ができると思っててん最初から。でも自信なかった笑。開けたらみんなやっぱりめっちゃ通るんよ。

最初の頃はほんまにずっと軒下で仕事しててん。んで、軒下で仕事してたら、朝掃除するときに通る人に挨拶されるねん、忙しそうやなとか。よくオンライン会議とかオンラインセミナーやってたんですけど、オンライン会議中にめっちゃ喋ってくるひととかおるんよ笑。みんなわかってへんし、気付くへん。っていうぐらい外にいた。ゴールデンウィークとか宝楽はずっとこの軒下で朝から晩まで仕事してるから会いたい人は相談してくださいって言ったら、めっちゃ人が来てくれた。

軒下のエピソードとしては、ゴールデンウィークに仕事してるんでいつでも皆さんの事業相談や喋りたい方は来てくださいって言ったら、穂積さんがいきなり来て、久々の再会だった。聞いてたら、実は里山の事業をやりだしてんけどちょっと話聞いてほしいって。そういうのがきっかけで働くようになった。最初は手伝いをしてくれてた。相談乗ってたら、やっぱり穂積さんもそういう仕事に関心があると、あとは人がおれへんからってのもあった。やっぱりなかなか乗組員はすぐ卒業してしまってる。その原因は僕が忙しすぎるから指示がちゃんとできてないから、ようわからんから辞めるって言った人もあった。人がすごい回転しててんけど、穂積さんはそれ大変やなって言って空いてる時間手伝うわって来てくれた。最初は週2とか週1とかで。穂積さんは軒下のエピソードで一番最大級の社会関係性資本ですね。

それ以外にも軒下エピソードやったら、一昨日穂積さんの知り合いの先生がおった。コーラスグループの人達だった。山中さんが受け答えしてくれてんけど、

年配の女性と男性がここで打ち合わせして、何か楽譜見ながら打ち合わせして  
るねん、明らかに音楽関係の人かな。その人らは The コロナ中で歌う所が無か  
った。なので、泉北ラボで実験的にコーラスの練習していいかって？いいです  
よ、電気いるから延長コード引っ張りやって言って外に今も置いてる。何かそ  
ういう時も軒下を使うんで、そういうのを見たらみんないいなと思う。あんま  
り軒下使いこなせる人おらへねんけど、保健室って行ってけんぶく保健室の健  
康相談とかは軒下でやったりしてる。結構軒ってすごい重要やなって思う。

筆者： 椅子と机はどんなこだわりがありますか？

A 代表： 外の机と椅子ってワンセット 6 万やねん、めっちゃ高いねん。フランスから来  
てるねんけど、アメリカのブライアントパークかなんか大きい公園で使われて  
るベンチで、再利用可能なベンチがあるねん。それがそのメーカーと同じモデ  
ルやね。ほんまは赤を買いたかったけど当時売ってなかった。あんまり増やし  
たらさ、将来的に俺がおらんくなったときに、椅子と机片付けてるのって山中  
くんやから申し訳ないなって思う。最初に 6 万かかるって言うてるからそんな  
高級な物外に置いてたらダメでしょって笑。毎日片付けてる。自分の中ではこ  
の席が一番ラグジュアリーで、自分の中で一番気持ちいい場所って考えてて、  
一番好きな椅子を置いてるから、ここに人が座っていると、めっちゃ嬉しい笑。

筆者： 中の机も発注ですか？

A 代表： 中の机はアトリエカフェって空間デザインチームがいて、繋がる days の住  
居作ってくれた。安川さんっていう近畿大学の方。この本棚も作ってくれた。  
元々はイベントとか展示販売する展示什器の空間デザインが得意な集団で、木  
を安いものを使ったりするのが上手い。で、泉北ラボができる前に作戦会議を  
ずっとやってたのよ。そのときに大人数でご飯食べる空間がすごい好きやねん。  
そこを見てるだけで幸せみたいな笑。一人っ子ってのはあると思う。大人数が  
楽しいと思ってる。作戦の時に、大テーブルを置きたいっていうのがあった。  
カフェの前に。スターバックスとかもあるやん、仕事してる人とかが使ってる  
大きいテーブル。それを置きたいっていったら、山中くんはどうせイベントや  
りたいでしょ、絶対でかいテーブルは邪魔ですよって言われた。嫌や、俺は大  
テーブルがいいって散々ごねたら、誰かがひっつけたら離したりできるように  
したらいいんちゃうみたいな。ほんまやなって言って安川さんにぶつけたら、  
考えてくださって作ってくれた。だから基本 90 か 60 で設計されてる。結局カ



フェの前やし、1人でも相席にできるし、あれをばらすと幅が狭くなる。レンタルスペース側は貸し切りで狭くなったら、分離して、縦にして3列にしたら良くなる。ちゃんとアトリエの方とデザインを考えて取り組んだ。何かこういう人数間で使いたいみたいな思いだった。

筆者： 木の使い方や工夫してることはありますか？

A代表： 中の木は目線を切ってるねん。目線が合えへんように切ってる。まずここに座ってる時にここに置くと目に入らへんやん。でもこっちに座ってる人がこっちに座ると目に入るやんか。これをこうすると、ここに座ってるカップルが、このグループから見えへんようになってる。さらにこの人たちはここで喋っても、こっちの大好きな人の顔を見ながら、カップルが見えないようになってる。そういう意図がある。ていうのを言ったら、増田先生がこの管理の簡単な木があるからいいよって言ってくれた。最初はなかったんよ。一歩ずつ増やしていった。めっちゃデカくなったよね。もう出来上がってしまってるから、木は増やさんかな。最初はいっぱい入れて動かそうとか言ってたけど、だんだんこれで固定されて安定してきたかな。今でこそマニュアルがあって机を元に戻してってなってるけど、最初はないからな笑。

筆者： 外のいっぱいある木はどういう意図なんですか。

A代表： あれは将来的に10年後とかを意識してて、軒先に木陰ができるようにとか、考えてる。ラボもカフェの横窓から買い物できたらいいよねっていうのがあって、木が外にあればいいかなって思ってる笑。今でこそ凄いけど、作るときなんかね笑。だいぶ悩んだよ。何がどうなのか全然わからなかったもん。宝楽のやりたいようにみんなに1回聞いてやってた。それをやりすぎちゃうと慌てる笑。大体やりすぎちゃうんだよね笑。

筆者： フリッジの所だけ屋根がないじゃないですか、それはなんでなんですか？

A代表： 単純にお金がなかった。設計士さんも多分何も考えてなかったと思う。あと、僕の想像に全くついていけなかった。そもそもあそこにコミュニティフリッジを置くっ言ってたのに、建築士さんが忘れてるとかもあった。

筆者： 中はほとんど宝楽さんが自分で考えたって言ってだと思んですけど階段も提案したんですか？

A 代表： 階段は向こうからの提案もあったかな。工事じゃなくて、後付け。建築基準法上の許可許認可では全然問題は無い。でも全然違法でない範囲でやって、同じ施工業者さんが建築確認検査終わってから階段を設置してくれた。全部造作です。

筆者： この仕切りのない空間は絶対したかったんですか？

A 代表： 今は社長室が欲しいと思ってます笑。けど、設計当時からは、広場みたいな空間にしたいとずっと思ってたから1階も2階も。全部見渡せるようにしたかった。その日その事で起きてることをみんなが共有する広場みたいな場所が作りたいていう。今はもう仕事しながら寝ててもばれへんような場所が欲しいと本間は思ってる笑。

筆者： 仕切りが無いこの空間において、ないことに対してメリットはさっき聞いたんですけど、デメリットはなにか感じてますか？

A 代表： うちにとってのデメリットはないかな。利用者さんにとってはデメリットはあると思う。密室がいいとか。デメリットではないけど、冬暑すぎるっていうクレームはある。薪ストーブが強力すぎて笑。

筆者： 設備とか全くわかんなくて、角度とかくスピーカーの配置とかは全然わかんないんですけど、意図はありますか？

A 代表： 色々考えた結果そこが良かった。これはエアコンの施工業者さんの考え。上のパイプとか見えるのは嫌やけど、プロがそーせなあかんって言うからしゃあないなあってなった。黒にしますか白にしますか？どっちでもええわってなった笑。シーリングハンガー付いててんけど、本棚と接触するから取り外した。僕らもわかってなかったし、設計士も分かってなかった。幸い薪ストーブこっちに置いたことで、熱が上がって行って上で循環していくから、この偏りが凄いこの建物には合ってたかな。だから、冬暑いくらいかな。薪ストーブって火力調整出来ひん。付けるか付けないか笑。そうなると窓開けるしかない。下と上の窓を開けて熱を逃がすとかめっちゃおもしろい？笑。

筆者： 外からだけでなく中からも見えますね。

A 代表： 一般的な飲食店は顔が指すとかやねん。年配の方って自分が口を開けて食べる所を外から見られるなんてありえないっていう方は割といらっしゃる。そういう方は横の風のこもんずへ行けばいい。

筆者： 寄付品の中で商品数を 1 点、2 点、3 点ってあると思うんですけど、基準はどうしてるんですか？

A 代表： お米は絶やしたくないから、2.3 日に 1 回持って帰ってねって言ってる。2.3 日に 1 回渡るようになるにはって考えたら 1 点かなって思う。今は感覚的にやってるかな。基準の管理をしてるのは今はももほちゃん。

筆者： 冷蔵庫代、電気代、エアコン代は財団が支払ってますか？

A 代表： うん。あと、カフェ全体の光熱費も支払ってる。山中さんには家賃を払ってもらってる。  
大学からの援助は一部ある。表向きの話では、居場所をやってるんやから、大学が財団に対して業務委託をしてる費用がある。だから一部補助がある。

筆者： なんで泉北ラボに難しい本が置いてるんですか？

A 代表： 財団が取り組んでる事業を検証するために関わってる本が多い。休眠預金とかの話はみんな知らんから、知れるために置いとく方が良くない？見る人が見れば泉北ラボのコンセプトっていうのは本を見ればすぐに分かる。

筆者： 結構本が空いてると思うんですが、意図してるんですか？

A 代表： ムチムチにしたいと思ってる。外の光が中に入って欲しいんよ。本間は電気つけてる理由も、一晩中付けてるねんけど、防犯もあるけど、外の通りの方が多少なりとも光ってる方が安心感があるねん。人が通れば光が着く緑道もあるけど。僕たちは地域の人に開いてますよっていう姿勢を間接的に伝えるためにやってる。これは最初から。1 日数百円とかかな。コミュニティフリッジもずっと電気ついてる。こういうのも、建物に語らせてる。誰も気づけへんけど、でもやっぱりいつも明るくしてくれてありがととか、言うてくれる人もおる。

成果指標として地域にそこまで影響してるかっていうと、それは分からへんよ。でも例えば、自治会さんが防災訓練や避難訓練をする時に、防災訓練の説明の最後とかにラボを紹介してくれるねん。泉北ラボは地域のためにやってくれてるカフェで、夜中も電気がついてて、防災の事も考えてくれてるんですよ、災害が起きた時もここを避難所にしよーって言うてくれてるんですよって紹介してくれる。ほんなら自然と地域のファンも増える。本が溜まっていけば、歩いてる側からも見えるようにしたい。今ちょっとずつ漫画も置き出してる笑。漫画を置くとまた、色んな漫画を置こうという人が増える。

筆者： フリッジ継続していくにあたって、寄付品が不足してて、どのように改善しようと思ってますか？

A 代表： 基本はつながる days のイベントに参加したり、認知を高めていく。今穂積さんに取り組んでもらってるのが、寄付を増やすためのプランっていうのをやって貰ってて、今度企業会員制度っていうのを作ろうと思ってる。泉北サポーターっていう名前にして、例えば会社に備蓄している災害用のお米とか水が賞味期限近づいてきたら、捨てるんよ。だから、捨てやんとこっちに寄付してって伝えてそういう人達を増やしていくみたいな事を企業会員さんに伝える。今までの泉北ラボのコミュニティフリッジは個人が中心だった。今度は法人っていう所に力を入れていこうと思ってる。

筆者： 山中さんや宝楽さんはいずれここを出ようと思ってる、宝楽さんはなんで早くからラボに居れなくなったんですか？

A 代表： 時代にあった事をやって関心度が深まる事を多く取り組んでるからかなー。最近では豊中にも地域の交流拠点を置きたい人がいて、喫茶ランドリーの方をわざわざ大阪に呼んでいた。その時に泉北ラボが紹介されてた。ついこの間までは、宝楽さんが自分の言葉でラボの事を伝えていたのに、僕の知らない人が知らない人同士に伝わるようになってる。こうなる事は予想もしてないし、実感もないな笑。難波駅だったり電車でラボの写真があるっていうのも今知ったし笑。想像もできひん。でもあくまでもラボは半径 500m の住民さんを目的してるから、それはそれ。基本は変わらない。

資料2 B氏へのヒアリング（文字起こし）

2024年12月4日（水）

筆者： 方楽さんとの関係性は？

B氏： 自分が days で行ってる姿を見てもらってたから方楽さん的には合うと思って声をかけてくれた。自分自身もお店やるのに、いろんな人が交流できる場所がいいなと思ってたから本当にお互いにちょうどいいのかなと思った。キッチンの方のデザインとか、配置は僕が決めさせてもらった。カウンターの高さとか。

筆者： カフェ以外で財団の仕事ってどれくらい関わってますか？

B氏： 基本的にはコーディネーターの1人になってる感覚。なので、ここを借りる家賃とか費用的なものはある程度安くしてもらってる。だから1人でお店を持つよりは、安くできてるかな。その代わり運営に困ってたら助けてる。たまたまスタートからいてるからコーディネーターって感じじゃないかもしゃんけど笑。位置づけ的にはコーディネーターの1人かな。どんだけコーヒーや食事が美味しくて居づらかったら意味ないし、逆にコーヒーが安くても美味しくなかったり設備が中途半端やったら、あんまり滞留しないのかなと思う。カフェ側の目線でいうと、美味しいものを作って提供するっていうのは当たり前で、より良くするために泉北ラボとしての価値が上がれば、必然的にカフェも価値が勝手に上がる。逆もしかりで、カフェの価値が上がればラボの価値も上がるからそこを意識してる。

筆者： 気持的にカフェの時間とカフェ以外の時間はどれくらいの割合ですか？

B氏： 一緒かな。カフェとラボじゃなくて、カフェ＝ラボやし、ラボ＝カフェっていう考え方かな。財団の仕事だから話しに行くとか、説明するんじゃなくて、カフェとして話しかけにいつついでに財団の話をしている。あとは、物があふれてて、ちょっと掃除できてないとか思ったら、ほったらすんじゃなくて、自分が掃除すれば綺麗にもなる。だからどっちにとってもプラスになるよね。

筆者： コミュニケーションをとる上で意識してることはなんですか？

B氏： 理想は全員に話しかけたい。どうしても忙しいときは無理やけど、本当は入ってきた人全員に何かしら声をかけたい。コミュニケーションは面白いと思ってるから声をかけてる。自分の知らない知識を教えてくれる人もいてるし、冗談を言って笑ってくれる人もいてるし、その話前も聞いたなみたいな人もいてるし、話が通じない人もいてる。飲食現場やってみて嬉しいのは自分が作ったものを美味しいって言ってくれるのは嬉しいけど、それだけやったら満足しないかなと思う。なので少し人と顔見知りが増えたら面白いのかなと。そこで意識してるのは深い関係にならないようにしている。

自分の主観的にいきたいお店って有名なところだと、常連さんがすごいたくさん入ってる場所とかが多いんだけど、常連さんで囲われてると新規の人が入りづらいとか自分が入りづらい。囲い過ぎちゃうと飲食店としてはすごいありがたいし、安定的な売上を作ろうと思えばコアなヘビーユーザーが来るのはすごいありがたいことだけど、その分新規のユーザーが来なくなるかなと思ってる。だから週1回来るか来ないかとかそれぐらいで来るようなお店にしたいなと思って話しかけるようにしている。この時間のこの席はずっとこの人いてるなって感じたら行きづらいやん。カフェに行きたかったけどちょっとなんかマスターとずっと喋ってるしこっちには話しかけてくれへんからとか。っていうのはそのときはすごい安定してるけど、常連さんは急に来なくなるから。自分たちもよく行ってるお店とか、ふいに行かなくなるやんか。でまた時間たったらふいに行き始めるやん。そんなもんだと思ってる。1週間に1回ぐらいの場所がすごいちょうどいいのかなみたいな。今日は来てたんやっていう感覚。

筆者： 全員に何かしら声をかけたいっていうのはどんな思いがあるんですか？

B氏： その軽い常連さんになってほしいな。気さくな人やとか喋る人なんやとか、ここにいていいんだなって思ってもらうために話しかける。話しかけて欲しくなさそうな人には話しかけないし、コーヒー持って行ってなんか全然反応ないなって思ったらスルーする。ちょっと反応良さそうやったらついでに軽く喋ったりする。

筆者： 泉北ラボでの動き方で意識してることがあれば教えてください。コミュニケーション以外のところで意識している所はありますか？



B 氏： 気づいたらやるかな。それこそ張り紙を月が変わった時に、新しいカレンダー貼ったり、張り紙を印刷したりする。時間がある時にする。なんかこぼれ落ちてそうなものを拾ってるぐらいの感覚かな。方楽さん自身もそうだし、穂積さんから指示を受け取るももほちゃんが出来ないことを代わりにやる。何かそれをほったらかしにして、あんまりいいことがないなって思う。メリットが無かったら別に俺の仕事じゃないとか、間に合わないのは自分の責任やろとかっていうのは何かそれ知ったところで何の得もないかなって思う。作業をしとけばラボが気持ちいい空間になり続けるかなと思う。

筆者： ありがとうございます。コーディネーターさんとの関わりで意識してる事があれば教えて欲しいです。

B 氏： キャパオーバーしないように見てあげようと思ってるのと、方楽さんの指示と違うことをしてないかどうかを見ておく。なんかそこまでしなくていいのかもしれないけど、それも別で二度手間になるのがあんまり得意じゃない。方楽さんがコーディネーターにこういうふうに指示してたけど勘違いして違うやり方をして、また方楽さんが教えなあかん。1日無駄にするからそういうことが起きないように、僕がなんかこんなこと言ってたなっていうのは何となく自分の中で噛み砕いてそれ通りやったら何も言われぬしね。何か明らかにちょっと道沿れそうやなってときはちょっと一声かけるかな。

筆者： コーディネーターに対してどうお考えですか？

B 氏： 個人としては入ったからには何か成長してほしいなって思う。その人に合った成長が見られるように手助けしてあげたいなって思う。コーディネーター全体としては、いわゆるボランティアだからどこまでやってほしいって言い過ぎると負担になる。逆に遠慮しすぎて言わなかったら、何か見てもらえてない感じやん。そこの判断が難しいなっていつも思う。コーディネーターに対してそう思ってるから、逆に個人に対して負荷になりすぎないようにとか、サポートしようかなっていうふうな流れになるかな。コーディネーターは同じ人じゃないから得意不得意はあるし、すごい掃除が得意な人には掃除をちゃんとお願ひするし、めっちゃ苦手な人に掃除してもらって中途半端にしても意味ないよね。そこは個人に対して何かどういう意味があるのかを伝えてあげるようにしてる。なんか雑用と感ずるときがどうしてもあるから、それをすることによってどう

いう人が助かってるのか、こういうことがあるよっていうのはしんどくなりそうな時には声をかけてる。

筆者： 泉北ラボが変化してきたことはありますか？

B 氏： レンタルスペースやランドリー利用などのラボ側の利用はすごい増えてきているなって感じる。それこそ最初はカフェしか利用目的がない方が多かった。利用者がレンタルスペースって何とか、ランドリーがあることも知らないし、ワーキングもいまいち分からんことが多かった。カフェとしては一番やっぱわかりやすく周知されてた中で、だんだんラボの機能がそれに伴って周知された。ラボ機能を使う人は今増えてるのかなと。レンタルスペースも絶対今年の方が去年よりも利用が多い。

筆者： それはラボで宣伝してるからですか？

B 氏： 声かけてるからっていうのもあるし、必然的に届く人に届いてるのかなって感じはするけどね。地道にずっとやっぱ運営してるから。口コミが多いかなと思う。こんなんでできるみたいやでとか、なんかこういうのできるって聞いたんやけどみたいな。利用者同士もそうやし利用者じゃないけど、講義の参加者とかが話を聞いて私やってみようかなとか、やりたい場所探してみたいな。そういう方にマッチングするようになったのかなって思う。

筆者： お客さんの変化はありますか？

B 氏： 学生が減ってる。学校の学生の数自体が減ってるから、必然的に一般の方が割合的には増えてきてるかな。ラボの機能を目的として来る人が増えたかな。コピー機があるとか、洗濯するとか。全体の利用人数は減ってるかな。やっぱ 2022 年からやっぱ一番多かった。コーヒー無料券を配ってたりした。方楽さんの知り合いとかが多かった。そっから利用者数は減ってるけど売り上げは上がってる。学生が減って、一般の人が増えたから単価が上がってる。学生割引をしてるからかな。あとは地域の集まりみたいなのが増えたから、売り上げが増える。けんぶく祭をやったあとの打ち上げをラボですてくれたりとか、前の自治会長が亡くなった時のお別れ会をここでやったりした。っていうふうに地域の役員の方が来てくれる。

筆者： 泉北ラボで学んだことはありますか？

B 氏： 学び続けてる感はあるかな。それこそコミュニティの事とか、施設的な事の話とか何も知らなかった。それこそ高田さんとかと喋る事で、地域のこういうことがあるんだなってのが学んでるかな。カフェ以外で関わる方と話すことによって、その自分の知らない知識を身につけたから学びになるかな。

筆者： 現在のコーディネーターのあり方について思うことはありますか？

B 氏： そもそも人がいないからね。今までやってきた中で思ったことは、コーディネーターさんは最終卒業してしまうなって感じた。それは悪い意味の卒業ではなくて、次に繋がる卒業をしていくんかなって感じてる。やっていくうちに成長していったそのときは自分にやれることって少なかったけど、それこそ出会いがあって働くことになりましたとか。そういう風になっていくんだなと思う。泉北ラボで関係人口が増えていくかな。

筆者： 泉北ラボの課題や改善点についてあれば教えてください。

B 氏： 良くも悪くも人の思いに動いてる事が多い。企業とかで考えちゃうと、人がいないっていうのは普通あり得ない。泉北ラボは人の思いがあるから運営出来る。だけどそこに甘えすぎたらあかんとかっていう風に思うし、何度も振り返るようにする。ラボの課題と自分の課題が違う。ラボの課題は外から見たら、人員確保が必要だし良くも悪くも方楽さんが忙しくなりすぎていない時が多いから、居てくてる人材が必要。一般的じゃなかったら自分がいてるから何とでもなる。だけどそこで自分の課題に当たってて、自分じゃない場合はどうするだろうとか思う。自分やから対応出来るけども、自分が人を雇って別の子がここで作業をしますってなったら、そこまで思いを持ってやってくれるかわからへんしそんなうまくやれるかもわからない。何かそこでちょっとすれ違いが起きたら怖いとは思ってる。だからラボの課題は、こっちが言っても仕方がない。自分の課題に集中するしかないかな。基本的にサポートしすぎないこと。自分以外がカフェをやっているのが想像できないよね笑。キッチンに立ちながら接客してるのが普通はわからない。だからカフェ側はそこを来年は課題とする。泉北ラボ側の課題は大学生を入れる事やボランティアセンターを作る話をしてる。

筆者： 週6になったのは誰の意見ですか？

B氏： 方楽さんと自分かな。個人的には開いてる日が多い方がいいよねって思ってる。飲食は空いてる日＝売り上げがあるからか両方の意味があるかな。休みの1日は午前中は買い出しと仕込みをして、午後は開けるようにしてるけど、その日によるかな。やから休みは半日しかないかな笑。

筆者： カフェの計画は1人でできるようにっていう空間だったんですか？

B氏： とりあえず1人で営業することをメインに考えて作った。自分の意思やな。

筆者： ドリンクお菓子主食のそれぞれの一番の人気商品は何ですか？

B氏： ドリンクはドリップコーヒーやね。お菓子はチョコクッキーかな。主食はサンドイッチになるかな。

筆者： コーヒーは1日どれくらい売れるんですか？

B氏： それはデータがあるかな。今日やったら普通のホットコーヒーが8杯。アイスコーヒーが2杯。あとはラテとか。平均的でいうと1日8杯くらいかな。アイスとホット合わせたら13.4杯かな。

筆者： クッキーって1日何枚作ってるんですか？

B氏： なくなったら作るから、その1週間に10枚~20枚。1回で12枚作る。大体1週間でなくなるんです。

筆者： 空間的なことを聞きます。キッチンにずっとおられると思うんですけど、フリッジを使用される方の声を聞こえるっていうのをおっしゃられてて、困ってる方がいたらどんな声掛けをしていますか？

B氏： 人が来たらピピッと音が鳴る。で、もしかしたらトントんってされるかなっていうふうに意識する。やっぱり今来てるなっていう風に意識してる。開けて声かけるとかはない。ちょっとどうしてもタブレットがアップデート入って違う画面になる時があるから、そのタイミングで対話するかな。

筆者： どの時間帯が多いですか？

B氏： それはデータを見てくれた方がいいかな笑。

筆者： この木に対して何か思うことありますか？その仕切りじゃなくて木じゃないですか。

B氏： 壁を作らずにしてるのはいいよね。木は方楽さんが考えてるかな。方楽さんの意図としては、きっちりした壁の仕切りは作らずに、少し見えるような仕切りとして草花を置いてるからっていうことは共有してる。自分の趣味で置いてるとかでは無いかな。どっちかって言うと面倒くさいからあんまり欲しくない笑。水やりとかもめんどくさいしな笑。元々は柱に当たらないぐらいだった気がする。結構伸びて成長してるな。もう多分最大の大きさは決まってるんじゃないかな。天井にぶつかるとは多分ないやろな。

筆者： カウンターは学生さんが一番よく座りますか？

B氏： 知り合いが多いかな。後は学生が多いかな。この時期が多いそうなので学生は冬によく座るな。予想やけど卒業が近づくとつれて、何かしら思いはあるのかなっていう。寂しいとか。卒業してこなくなるなとかっていうのは何か多分学生本人達は思ってるわけじゃないと思うけど、何となくそういう感じがあってなんか急に喋ることが増えるとかはある。急に増えるんよ。

筆者： カウンターは返却口とかぶってるじゃないですか。その時はどうしてるんですか？

B氏： 基本はカウンター座ってもらわないようにしてる。一般の人は座らへんかな。多分座る側も不便だし。返却口に色んな人多いから。学生とかはそんな気にせへんし、なんなら預かってくれるから店員のふりしてくれたりする笑。あとは自分の知り合いが来たときに喋れるようにっていう理由もある。どうしてもキッチンから出るのが難しいときもある。せっかく来てもらったのに結局話せないのはさみしいよね。

筆者： 椅子が3つなのも配置的にベストだからですか？

B 氏： 元々は全部棚やったんですよ。全部棚にもなるしカウンターにできるようにしてる。もしかしたら今後によっては変わる可能性もある。4 つになるかもしやんし、2 つになるかもしやん笑。でもそんなに考えてないかな。4 つ置いたら邪魔かな笑。きつきつすぎる。3 つぐらいがちょうどいいかな。あと椅子のカラー的にそっちの方がいいのかなって思う。椅子のお願いしたのは自分やけど、お金は財団かな。カフェの方のデザインはこうしてほしいって言った。ライトの黒と同じような緑の色やつも。換気扇の上とかを統一してたけど、あまりにも暗いから緑の細長い電気は自分で付けた。1 年、2 年ぐらいは黒色にしてたけど、流石に暗いと思ったから付けた。

筆者： オープンしてコーヒーが1 番ずっと人気なんですか？

B 氏： そうやな。一番頼みやすいし、値段的にも買いやすんじゃないかな。逆にご飯系はチキンオーバーライスが人気やな。それこそ最初の 1、2 年は毎日日替わりやった。今年になってやっとああいう 3 種類とかになった。その理由は学生が減ったから。学生が多かったときは、毎日違う料理食べて欲しいなと思って日替わりにしてた。けど学生が減り利用数が減ってきてるから日替わりするのもしんどくなった。だから1 ヶ月の固定でいいかなって思って今年から変えた。学生によっては毎日食べに来てる子もおったし。やっぱり全員が全員そうじゃないからね。あとは、隣の風のこもんずを利用する人も増えたかな。なんか前まではそんなに使いづらかった感があった。全然オープンじゃないから。けどなんとなく今はみんなわかってきて使いやすくなったんかな。風のこもんず側は慣れてきたんかなと思う。泉北ラボはワンオペやかな笑。それでもメニュー多いって言われるよ。

筆者： 今コミュニティ活動に対して泉北ラボ以外で取りこんでいる事はありますか？

B 氏： コミュニティ活動に今は興味はない笑。興味はないけど泉北ラボをやるにあたっては、コミュニティを意識しないとやっていけないから泉北ラボでは意識してるかな。泉北ラボ以外でコミュニティに特化してる事はないかな。そんないい人じゃない。基本的に自分の目に見える範囲の人が幸せになってくれたらいいなと思ってから。自分のお店に来てくれる範囲の人で、ここに来てよかったなと思って貰えるような意識をしてるかな。それが結果的にコミュニティ的な活動に繋がってる。

筆者： 最近キッチンから全エリア眺めれる話をされてたんですが、何で気づいたんですか？

B 氏： マジでふと思ったんよな。この卒論の話があって、何となく考えてみた。大石君が建築学部やから建築的な面で何かあるかなって言うふうに考えて、そのときにふと考えたかな。そういえば起こって見えるなって思った。今まではあんまりそういう風には思ってたかな。

筆者： ありがとうございます。コーディネーターの取り組みとして、真剣な姿勢 70%、余裕のある姿勢 30%みたいな考えは会社のときの経験があったからですか？

B 氏： コーディネーターとしてっていうか、自分の生きる感覚として余裕を常に持っておきたい。自分が過去のサラリーマン時代に余裕なく働いてると何かうまくいかなかったなっていうのは大きかった。それこそ自分がいらだったりと一緒に働いてる人たちの機嫌を悪くしてしまったりとかもあった。たまたま上司が福助と別の会社を持っていた。それが建物の 2 階と 3 階に入っていた。俺の上司がその会社やってん。その社長が福助に入って、一緒にちょっとやってくれてなった。社長でもあるけど、福助の会社のメンバーでもある形だった。その人の下についたから何かいわゆる普通のサラリーマンの上司というよりかは、普通の経営者の下についた。そこで感覚が結構変わったかなって思う。それまでは精一杯、とりあえず頑張ることが良しと思ってた。自分が 120%出して何とかしようっていう考え方をしていた。それを経営者側で考えたら人を使ってなんぼなんよ。自分の社員なんだから人を使う事が仕事やぞって。そこで人を使うってのは予期せぬことが起きるんよ。今日の 1 日の仕事はこれだけありますって言ったものの、後から増えたりとか、その日体調崩した人が早退するとか、平社員がめっちゃ喧嘩してるとか。何かイレギュラーなことが起きると対応できない。だから少し自分に余裕を持たしてイレギュラーに対応できるようにした方が効率よく回るなって会社員自体に経験できた。それが結構今の生き方に繋がってる。

筆者： 約 3 年振り替えてみていろんな空間があったと思うんですけど、自分のこの空間良かったなみたいな利用者とか、イベントが混ざった空間があって、この空間めっちゃいいなって思った空間とかはありますか？



B 氏： なるほど。老若男女みんな居てる時かな。老人、子供、お母さんがいる空間かな。奥でおばあちゃん達がお茶をしてて、横で子連れのお母さんが来て子供とおもちゃで遊んで、カウンターにも学生が居てるみたいな。全世代がいてる状況はなかなかないのかなっていう、こういう居場所事業の中で。偏見的やけど居場所って固定しがちって思う。こういう人みたいな。高校生とか不登校の子供たちとか、何かしらがそういうのもある。そんな中で、こんなになんかいろんな人が入り交じるっていうのが泉北ラボの特別な所なのかな。いつ来てもおじいちゃんおばあちゃんばかりがここで屯してはいないやん。じゃなくて、子供が走り回ったりとかめっちゃ泣いてくれたとか笑。入り乱れてるのが素敵なのかなって思う。

筆者： 逆にこれから4年目以降はそういう空間も大切にしつつも、何かこんな空間であってほしいなみたいな願望とかってありますか？

B 氏： 全然今は今で良くて、それがなぜかっていうと、最初の話に戻るねんけど週1回、2週間に1回来てくれたらいいっていう理由があって、その結果がいろんな人が来ることになってる要因なのかなって思う。これはカフェ側の考え。おじいちゃんおばあちゃんばかり来るように仕向けるんやったらこんなご飯作らへんよ。ちょっとヘビーすぎるやん。でも意外と食べるやん笑。意外と頼んではるやん。食べるんやって思うやん。まあ残す人も居てるけどね笑。やっぱ自分がお店やる中で、いろんな人が来てほしいと思う。それが反映されてうまくいってるかなって感じがします。

筆者： 他にフードメニューを増やしたいことはありますか？今のメインって主にサンドイッチとフードですか？

B 氏： サンドイッチは自分が手をつけずに売り上げを作るためのもの。作っておけば営業中やから楽。ワンオペやから売り上げを作らないといけないっていうのがあって、ご飯だけやっているとやっぱ提供出来る量が変わる。やからサンドイッチで売り上げを作る。で、ご飯は自分が自信があるから食べてほしいなっていうのと、なんか泉北ってじいちゃんばあちゃん用のメニューばかりなんですよ。他の場所とかは。ランチ行ったらザ・ランチみたいなものが多い。ちょっとジャンキーなものがないんよ。堺の大阪市寄りとかやったらあるねんけど、じゃなくてこういう所にもこれ何みたいな場所かあったらいいなって思ってる。まあ逆に自分が和食作られへんのもあるけどな笑。

やからサンドウィッチは売り上げのため。で、ご飯で胃袋を捕まえて、また来たくなる食べたくなるっていうのは若い人世代に対してかな。おじいちゃんおばあちゃん世代にはコーヒーがあればいいから。コーヒーとちょっとお菓子とかクッキー、ミックスナッツとかがあればいい。あとは家賃とかを安くしてもらってる分、メニューの価格を下げてる。これが通常値段で場所を借りてるとしたら、もう 200 円程高くなる。安い分こんなんでもいいのとかラッキーな気分や得した気分を味わって欲しいと思ってる。飲食店は基本ドリンクで稼ぐんよ。利益率が高い。やからドリンクを売る。基本はホットコーヒーが多いかな、利益率はそんなにないけど。おいしいコーヒーがこれぐらいの値段で飲めるっていうのが凄いいいなと思ってる。今は 380 円やけど元々は 360 円やった。今は物価上がって豆も前の 2 倍の値段してる。何か他であんまりないものがここにはあるみたいなのが面白いかなって思ってる。

別にホットコーヒーだけでいいんやけど売ろうと思えばね。でもなんかかわいい絵を書いてくれたみたいなの、やっぱそういうのが人を掴むんじゃないかなと思ってる。これが経営者として正しいのかわからんけどね笑。

資料3 C氏へのヒアリング（文字起こし）

2024年10月24日（木）

筆者： 泉北ラボのコミュニティフリッジに関して質問させていただきたいと思います  
まず、利用者さんについてなんですけど、フリッジを利用する方が多い年齢層  
を教えてくださいませんか？

C氏： フリッジは基本今子育て世帯で、条件を備えてやっているので子育て世代だ  
から20代から40代の方が多いですね。年齢は聞き取りしてないから、見た目  
で判断してるけど、見た感じ大体子育て世代と同じぐらいだと思う。

筆者： 利用者の中でどういう深刻な問題を抱えてる方がいますか？

C氏： 普通に子育て世帯で且つ児童扶養手当(1人親世帯)を受給してる方だから、  
自分1人で子供を育てないといけない状況にある人やから、それだけでだいぶ  
深刻だと思うし、その人にどれだけサポートがあるのかちょっと見えないけど  
しんどい状況に心がある人もいればって感じかな。あと、子育て世帯で就  
学援助を受けているって条件やったら、就学援助はご両親揃ってても収入  
的にしんどい人って要件になってるから、今この物価高の社会で基本的に  
しんどい状況にあるというのは、すごい大きな問題かな。

筆者： 子育て世帯に焦点を当てた理由とあって知ってるんですか？

C氏： それは宝楽さんが言う思うんやけど、泉北のまちびらき50周年期間に市民い  
ろんな人と集まって話すというときに、子育て世帯が頼れる場所がないですね、  
制度はないよねって思った。介護の方やったら介護保険があるからケアマネさ  
んがいるが、子育て世帯は全部自分で抱えなきゃいけない。なので、ここをシ  
ェアすることが一番大事な事かなと思います。

筆者： ありがとうございます。今現在フリッジの利用者さんと穂積さんが繋がって  
たりしますか。また、泉北ラボでの繋がりや泉北ラボ以外での繋がり  
の関係を教えてください。

C氏： 一応コーディネーターという仕事上の関係ということもあるので、泉北ラ  
ボ以外で繋がるってことはないかな。私も泉北に住んでたら繋がれる関係はあ  
ると

思うけど、河内長野に住んでるから難しいね。宝楽さんは自治会とかいろんなところで住民さんと繋がって、フリッジの利用者には詳しい。わたし的にはほんまにこの人はちょっと見てあげないって言う方はちゃんと注力して見るようにしてるね。例えばこの春に来られた方は、自分は1人でお子さんが3人、夫とは離婚をしたけど教育費はもらっていません。今想定中で引っ越してきてたところですよ。親は大阪から遠いので頼る事が出来ません。その方は頼るところが本当になくなって、しんどさを抱えているから、行政の援助頼るということができない、頼らないかん状況やのに出来ない。そうなった時にどうするか、児童扶養手当がいくら出るか分からない状況で生活してる。子供3人いるのに。こういう人たちは結構多い。

また、一昨日に20代の女性が一人暮らしして生活保護を受けている。食べるものがないと言って何回も来られる。でも生活保護だったら泉北ラボのコミュニティフリッジは食品を提供出来ないじゃないですか。しかも子育て世帯でもないです。私も緊急支援的に1回お米はあげるけど、1回きりだよって言ったけど多分理解ができなくて、何回も来てしまう。その方自身もちょっとしんどさを抱えていて、多分理解ができなかったり、他に言っていくところがない。なので、どうしようってなったときに、コーディネーターの高田さんに繋いだ。高田さんは相談員としてのプロやから、一昨日女性に会ってもらって話してもらった。あとは宝楽さんから民生委員とかに行ってもらおうとか、いろんなルートを提案した。その方が本当にしんどくてもなんとかしてあげれるようにしたい。こういうことは必要なと思う。こういう方と相談する事って何回も来てもらえるような受け入れをしないと来ないんじゃないかと思う。良かったか悪かったんかわからんけど、最初に米を渡してとか、やり取りを拒絶感のないやり取りをしたから、他の助けられる行政と繋がれたのかな。多分やけど、行政の方がいっぱい人を救ってるから、条件がちゃんとしていないと手当がない。だからそうじゃなかったら無理ですとしか言えない。それが行政の仕事。コミュニティフリッジはちょっとそういうグレーな部分もある程度相談しながらやけど引き受けてどこかの行政に繋ぐとか、何か繋がるように支援している。

筆者：そこが気になって、前聞いた時も行政だと限界があるみたいなお話されてて、こだわりはあったんですか？

行政がやってることの方がたくさんあるしめっちゃ大事やと思うねんけど、フォーマルじゃなくて、インフォーマルな人であるからこそできることっていうのがグレーな人たちにどう対応するかみたいな事は考えてる。コーディネーターがどういう存在かっていうのはある程度言語化して整理しておいたらできるけど、そうじゃなかったら逆になんでみたいになっちゃう可能性もあるよね。

筆者： 利用者に1回必ず書類書いてもらって、その後は割と会う頻度がなくなったみたいな話をされてたんですが、実際はどうなんですか？

C氏： そうやねん。最初に宝楽さんから別に行政じゃないから、そんな権利もないから何回も何回も介入するとかもないねんけど、最初に顔を合わせて話せるような関係にはしとこうっていうのが宝楽さんのこだわり。でその後は別に会わずに利用できるってことが大事。自分のタイミングで来て、自分こタイミングで持って帰るっていうのが大事だから、介入はしないんけど、ただ最初の面談とかで相談できる人って印象づける事や何かあったら言ってください。って声をかけたりする。もうコーディネーター側はそれしかできない。利用者やさっきの困ってる方が相談を言ってきてくれたら誠実に対応してる。また1年に1回書類の更新をしてる。書類の更新のときに連絡が取れる。例えば児童扶養手当が終わったりする方もおるやん。再婚しましたとかいう理由で。状況変わっても扶養が必要なくなったそれでいいやん。そういった確認をしている。

こういう作業は私になってからしてるかも。今まではそうじゃなかったかも。その面談もしてない人もいたそうです。ただ多分やけど自分が法律事務所での経験で結構大変な貧困問題に興味があったから必要だろうなと思ったから実験的な感じで取り組んでるかな。

筆者： 利用者が泉北ラボのカフェだったりレンタルスペースを使用することってあると思うんですけど、そのときって何か周りに配慮だったり、取り組みとかしてたりしますか？

C氏： 全然してなくて、利用者さんの中にも大きな幅があって、ちょっとしんどいから利用させてとか、でもそこまで困ってるわけじゃない方もおる。そういう方はカフェ利用もしはるし、色んなことをしはるから、何か特別する必要はない。本当にいろいろやねん。ほんまにしんどい方やカフェにも入りづらい方もおられるかもしれないけど、そこはご本人にお任せしている。フリッジの条件は一応

あっても、その中でも千差万別してる。元気で働けていて、事情があって離婚したけどちょっと余裕ある人もいれば、DVとかから逃げ出した人もおるやん。全然状況は違うかな。

筆者： 利用者さんにどんな会話をして、感謝されたり、褒められたりすることがありましたか？

C氏： 別に私が感謝されるようなことは正直ないと思ってる。フリッジという仕組みを作ってくれてることは、私が作った訳ではないねんけど、感謝される事は多いかな。仕組みがあるかないかでも全然違うし、作ったことで真剣に考えてくれる人が増える。僕たちのような若者。これをどうしていくか、もっと給付を集めようとか、色んな事を考えるね。泉北ラボのような場所があることはいいよね。あとはできるだけ親切に対応したりとか、わかりやすく話をしたり聞いたりして暖かい雰囲気にいるという事は気をつけてるかな。

筆者： 次はフリッジの寄付者についての質問なんですけど、支援者が多い年齢層とか、ありますか。

C氏： 女性が多いかな。年齢層は結構バラバラかな。印象としてシニアの方で余裕があったりして、贈答品をもらうことが多い。お歳暮やお中元をもらっても旦那と二人だから食べきれないからもったいないくて持ってこられる。あと生協が多い。生協の注文っていうのは注文してから1週間後に届くねん。あと固定配送とかもあって、牛乳を毎週4本を頼んで、牛乳をいっぱい飲むときもあれば、子供とかがあんまり飲まなかったりする時もある。しかも固定で来るから。固定は変更できるけど、うっかりしてて返しそびれるとかある。そういうのでちょっとだぶついてるものがある時、特にシニアの人とかやったらさこんな買ったけど食べられへんわみたいな事がよくある。りんごをいつも余らして持ってくる女性もいる。

基本受け入れてるものは食料品か日用品。他に支援者の例としては、おてらおやつクラブの方がいる。お寺ってめっちゃ贈答品が届くねんけど、住職さんってそんないっぱい食べられへんやん。神様のお供え物の払い下げ先として、泉北ラボのようなフリッジやフードバンク、子ども食堂に渡すっていう仕組みが

あってん。実は体系化されている。私も全く知らなくて、もっとはやく登録しとけばよかったと思う。そのお寺おやつクラブは NPO なんかな。近所の住職さんが山に持ってきてくれてて、お寺でたくさん物が集まるけど食べないっていうのは地域であった。だけどそれを体系化した NPO も少ないよね。

あと、利用者さんからの寄付もあるよ。利用者さんも幅は広いから、子供が小さかったりしたら、これもらったけどうちの子絶対食べへんから寄付しとくはってという人もおる。利用者さんでもコミュニティフリッジのような地域の為の寄付冷蔵庫ありがたいから、逆に貢献したいっておっしゃる方はかなり多いよ。

筆者： 利用者さんが、渡すときは絶対泉北ラボに入らないと駄目ですよ？

C氏： そうね。普通にはいみたいな感じでもらうかな。

筆者： 渡してもらわないですか。それで機械を通すじゃないですか。そしてすぐフリッジに持っていくんですか？

C氏： 1 回寄付品は受け取ったら、ももちゃんが基本統一してくれてるから、一旦階段の下に保管する。冷蔵のものとかじゃなかったら一旦保管する。それでもももちゃんが登録してくれてフリッジに並べてくれる。ただ時間があつたら、その場で登録する事もある。冷蔵物とかね、期限が早いものはすぐに登録する。ヨーグルトとか。ももちゃんが受け取ること自体が、高頻度ではない。穂積さんも常におるわけじゃないから、山中さんがやってくれる事が多くて、山中さんも冷蔵やったらすぐ出しているけど、そうじゃなかったら階段下に置いといてくれたりしている。

筆者： 米はお金で買ってるんですか？

C氏： フリッジはお金で寄付してもらった事があつたので、取り崩して、ちょっとずつ買ったりしてる。業務スーパーで。買って持って帰ってきて測ってフリッジに入れていく。結構手間かかるよね。だからもっと大石も働かなあかん笑。その一連全部できるようになってほしいね笑。それも多分ボランティアさんの力に頼らないと継続できないと思う。他の業務が圧迫してたりすると難しい。



いつもその作業手間がギリギリになる。必要な機能で絶対生かしたいけど手間かかるよね。今はバランスが難しい。

筆者： 次がこの前ここで米を測ってって思ったんですけど、米測ってたら利用者さんに見られるじゃないですか。見られて何してるんだって声かけられることはありますか。また、寄付されたものを管理してるって説明したら、利用者自身も管理するみたいなそういったエピソードとあってありましたか？

C氏： 私それ必要やなって思っててんけど、結局話しかけてくる人をどれだけキャッチするかやねん。ちょっと米測ってくれませんかって突っ込むんよ笑。少し話していくうちに、特に学生とかなら測ってくれへんって言ったら、わかりましたって言うってくれるんよ笑。大石とか。やからこの機能を回し続けるには、多少凶々しいと思われるかもしれんけど、それが全体のためになるなら突っ込んでいこうと思ってる。また、まおちゃんとかやったらフリッジにたくさん来てくれます。それで事情を聞いて、泉北ラボのスタッフとしてやってくれないかって言ってきたところはありますね。

まおちゃんは前から寄付してくれる人やって、何に寄付してるかっていったら、お米券とかを寄付してる。お米券は行政から子育て家庭に送られるの知ってる？大阪府知事がばらまいてくれてて、1人につき1万円かな、子育て世帯にお米を買えるようにした券。それをまおちゃんは自分のために使わずフリッジのために使ってるんやと思う。多分そのお金も残ってるんやと思うねん。いろんな恩沢で。私とかすぐ速攻使って終わるねんけど笑。そうじゃないお宅も多分あるやん。そういうお宅とも繋がれたらいいよね。まおちゃんにはそういう取り組みを若いのになんでしてるのって尋ねたら、実は寄付する事が必要だと思ってるって興味があると思ってるって言ってくれたからスタッフに呼んだ事がありました。

筆者： あと2ついいですか？寄付者と利用者の直接的な関わりとかはありますか。

C氏： ないかな。利用者っていう事も分からないから、そのコミュニティ形成はわからんかな。付箋を貼ってくれてるっていうのはちょっと大きいけど、寄付者の方に伝える事はあまり出来ていない。お礼の言葉とかを頂いても今は寄付者の方には伝えられていない。

筆者： 僕が思ったのは全国のコミュニティフリッジは付箋貼って、多分そこで終わってる気がしてて、ここはこういう居場所があるから、付箋以外の繋がりもあるんかなって思ってます。

C氏： 寄付者が持ってきた時にタイミングよく利用者さんが直接会うってことがまずないかな。私らやったら直接話しかけられるよね両者とも。寄付があるから本当に助かってますっていうのを代弁することはある。例えばありがたい言葉やエピソードとか覚えとくんよ。寄付者の人に何かこういう状況でありがとうっていう声もありますとか言ったりはするかな。ただ、私も常に会うわけじゃないか、今生活大変で子育てしてるから感謝されてますとかを、言ったりはしてるかな。そういうことはコーディネーターが返してるね笑。

筆者： 最後はフリッジの課題だったり、改善点、何か気になることがあれば教えてください。

C氏： 100 個ありますよね笑。まず広報やろ。管理、寄付者の方をもっと獲得したいし、町の利用者さんの候補の方にもっとわかるようにしたい。今例えば冷凍庫をほとんど使ってなかったり、冷蔵庫の下の段が空いていたり、もっと活かせるはずやけどそこまで活用が出来てないね。もっともっと稼働できるかなって思う。例えば地域の家庭菜園してる人と連携したいと思ってる。そしたら野菜を置ける。利用者さんにアンケートしたいかな、個人的に。どんなものを売ってほしいかを知りたいってまおちゃんからよく聞くかれてたから、電話する機会には聞くようにしてる。けど、利用者さんってフリッジのような制度がある事をあまり人には言わないようにしている。だから今あるものについて調べたい。

前に私じゃないけど、コーディネーターの調査でジュースとかお菓子をおいてほしい声が多いですっていうふうに聞き取りをしてきはってて、本間かなと思ってた。利用者に聞くには聞く力を持ってないと難しい。困ってる状況の方に何が欲しいですかって聞いたら、今ある物を言い張るやろーなと思ってて、もうちょっとうまく聞いてあげればいいなと思っててん。そういう思いで聞いてたら利用者さんはジュース買う余裕がほんまにないねん。誕生日しか買ってあげられないって人もいた。だからジュースがあると本当に嬉しいっていう声があった。そこまで聞いたらそうなんやなって思う。単純にジュースが嬉しいですじゃなくて、なんでなんっていう所が大事かな。例えば精製食品は十分ある

けど、余分なものを買えないからそこを欲しいっていう声もある。疲れてるときにすぐ作れる物が欲しいとか。私はもう野菜とか置いちゃえば、楽ちゃうかなと思う。この前あった出来事が、子供に食べさせる食品がなくて、子供が学校の健診に引っかかってきた。成長曲線に到達してないですよ。その人も最初電話で話してたら、何でもいいです、本当に何でもありがたいですってなるやん。でも深く聞いていったら、本当の事を言うと栄養のある食品を子供に食べさせたいんですって言われてん。だからどこまで聞き取れるか重要な。考えると、子供の食育っていう視点も本間はいれたいから野菜とかも置きたい。宝楽さんはどんな事を考えてるかは知らない。これは私の考え。

筆者： 利用者さんのエピソードを、聞いた上で、どうやって寄付者さんに伝えようと思ってますか？

C氏： 例えばコーディネーターやからここおるやん。それで、俺は家庭菜園をしてて、夏とかは夏野菜がめっちゃ余ってるとかいう人にそのうち出会うかもしれへんやん、コーディネーターとして働いていたら。その人にそのときピンポイントで頼んだら早いじゃないですか。で、今の寄付者さんに野菜買ってきてっていうのはなんかちょっと違うかなと思ってて、それでたくさん届いても処理しきれないってなるとら意味が無いから、やるんやった実験的にちょっとずつやった方がいいかなとか思ってます。食品ロスになりそうなものがあれば食材をフリッジに置けますよとか、アンテナ張りながらやればいいのか。その人も困ってるわけやからね。その人からもまた繋げてくれるかも知れないしね。俺の隣の畑の人も余ってるってなると思うんですね。食品ロスがあればラボに届けばいいってなる。だから、量のバランスが難しいよね。いきなりバーンってきてもね。直接寄付者に言うより、コーディネーターを介した方がいいかなと思うね笑。

筆者： 野菜ってフリッジには少ないんですか？

C氏： 全然置いてない。宝楽さんから米は絶対って言われてるけど、そもそも寄付品が今は足りてない。だから野菜とかまで手は回ってないかな。しかも、今まで野菜を結構受け取らないようにしてた。スタッフの人員がさ、安定してなかったから。腐らせたりしたら困るし、管理が難しいよね。